

# 前尾根遺跡

(第6次発掘調査)

平成15年度県営圃場整備事業柏木  
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

2004.3

長野県原村教育委員会

# 前<sup>まえ</sup>尾<sup>お</sup>根<sup>ね</sup>遺<sup>い</sup>跡<sup>せき</sup>

(第6次発掘調査)

平成15年度県営圃場整備事業柏木  
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

2004. 3

長野県原村教育委員会

表紙地図 ○印が前尾根遺跡 10,000分の1

## 序

このたび平成15年度に実施した前尾根遺跡第6次発掘調査報告書を刊行することになりました。

発掘調査は、県営圃場整備事業柏木地区に先立って、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から補助金交付を受けて村教育委員会が実施したものであります。

前尾根遺跡は当地方屈指の大遺跡であり、今までの調査で100軒を超える縄文時代中期の住居址、顔面付釣手土器をはじめ数多い土器や石器を発見しています。今回は居住域から外れた尾根北斜面の調査でしたが大きな期待はありました。

調査では、縄文時代中期の生活用具の廃棄場を発見し、縄文の人たちの生活に触れることができました。発見した土器と石器は数多く、縄文時代中期の生活解明にむけての好資料を提示することができたものと思っています。

このたびの発掘にあたり、諏訪地方事務所土地改良課各位、柏木区及び同区実行委員会各位、地元地権者の方々のご理解とご協力、長野県教育委員会のご指導、発掘調査にかかわる多くの皆様のご協力で深甚なる謝意を表する次第であります。

発掘現場では作業員の皆様のご苦勞により、失われていく貴重な資料を記録に残すことができました。また、発掘調査報告書刊行に至る過程で、お世話をいただいた皆様にたいして厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

原村教育委員会  
教育長 津金喜勝



## 例 言

- 1 本報告は、「平成15年度県営圃場整備事業柏木地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する前尾根遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査補助金交付を受けた原村教育委員会が、平成15年6月2日から10月31日にかけて実施した。  
整理作業は平成15年9月19日から16年3月26日まで行ったが、整理作業当初は発掘調査と遺物の水洗いを同時に進めた日がある。
- 3 現場の発掘作業における記録は平出一治・坂本ちづる・小林りえ、写真撮影は平出が行い。基準杭の設置は株式会社両角測量、遺構測量の一部は株式会社写真測図研究所に委託した。
- 4 図面・写真・遺物等の整理は平出・平林とし美・武藤雄六・上島淑枝・小島久美子・小島正雄・小林明美・小林智子・小林りえ・小松弘・坂本ちづる・清水正進・田中耕平・田中初一・津金た子・西沢寛人、土器の実測は株式会社シン技術コンサル、石器の実測は株式会社アルカ・株式会社写真測図研究所・株式会社シン技術コンサル・株式会社東京航業研究所、土製品の実測は株式会社シン技術コンサル、石製品の実測は株式会社アルカ・株式会社シン技術コンサルにそれぞれ委託し、土製品の一部を坂本が行った。
- 5 執筆は平出が行った
- 6 本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。  
なお、本調査関係資料には、20の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、ご指導・ご助言をいただいた多くの方々に厚く御礼申し上げる次第である。

# 目 次

序	
例 言	
目 次	
I 発掘調査の経過	1
1 発掘調査に至る経過	1
2 調査組織	2
3 発掘調査の経過 (抄)	2
II 遺跡の位置と環境	3
III 調査と層序	7
IV 遺構と遺物	9
1 小  豎  穴	9
2 遺物集中箇所	11
V ま と め	51
報告書抄録	

# 図 版 目 次

第1図 原村域の地形断面模式図 (宮川—前尾根遺跡—赤岳ライン)	1
第2図 前尾根遺跡の位置と周辺遺跡	4
第3図 発掘調査区域図・地形図	6
第4図 遺構位置図・グリット図	7
第5図 土層図	8
第6図 小豎穴101・102実測図	10
第7図 土器・石器出土状況図	11
第8図 遺物集中箇所出土土器実測図・土器拓影1	13
第9図 遺物集中箇所出土土器拓影2	14
第10図 遺物集中箇所出土土器拓影3	15
第11図 遺物集中箇所出土土器拓影4	16

第12图	遺物集中箇処出土土器拓影 5	17
第13图	遺物集中箇処出土土器拓影 6	18
第14图	遺物集中箇処出土土器拓影 7	19
第15图	遺物集中箇処出土土器拓影 8	20
第16图	遺物集中箇処出土土器拓影 9	21
第17图	遺物集中箇処出土土器・土製品実測图	22
第18图	遺物集中箇処出土石器実測图 1	25
第19图	遺物集中箇処出土石器実測图 2	26
第20图	遺物集中箇処出土石器実測图 3	27
第21图	遺物集中箇処出土石器実測图 4	28
第22图	遺物集中箇処出土石器実測图 5	29
第23图	遺物集中箇処出土石器実測图 6	30
第24图	遺物集中箇処出土石器実測图 7	31
第25图	遺物集中箇処出土石器実測图 8	32
第26图	遺物集中箇処出土石器実測图 9	33
第27图	遺物集中箇処出土石器実測图10	34
第28图	遺物集中箇処出土石器実測图11	35
第29图	遺物集中箇処出土石器実測图12	36
第30图	遺物集中箇処出土石器実測图13	37
第31图	遺物集中箇処出土石器実測图14	38
第32图	遺物集中箇処出土石器実測图15	39
第33图	遺物集中箇処出土石器実測图16	40
第34图	遺物集中箇処出土石器実測图17	41
第35图	遺物集中箇処出土石器実測图18	42
第36图	遺物集中箇処出土石器実測图19	43
第37图	遺物集中箇処出土石器実測图20	44
第38图	遺物集中箇処出土石器実測图21	45
第39图	遺物集中箇処出土石器実測图22	46
第40图	遺物集中箇処出土石器実測图23	47
第41图	遺物集中箇処出土石器実測图24	48
第42图	遺物集中箇処出土石器実測图25	49
第43图	遺物集中箇処出土石器実測图26	50

# 表 目 次

表 1	前尾根遺跡の位置と周辺遺跡一覧 1 .....	5
表 2	石器計測表 .....	53

# I 発掘調査の経過

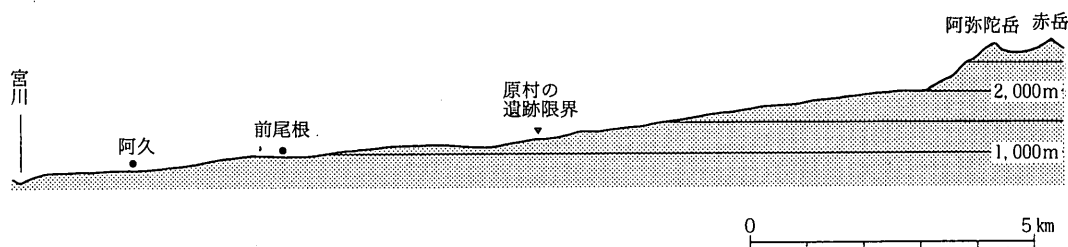
## 1 発掘調査に至る経過

農業者の高齢化、後継者の減少は原村でも例外ではない。このため労働効率の面から機械化が必要となり、さらに機械化のための耕地整備は不可欠となる。こうした考えのもとに圃場整備事業は進められてきた。

平成5年度から実施されてきた「県営圃場整備事業原村西部地区」は、事業名が「県営圃場整備事業柏木地区」に変わりはしたが10年目をむかえ、前尾根遺跡の保護については、平成13年12月3日に行なわれた「平成14年度県営圃場整備事業柏木地区にかかわる埋蔵文化財保護協議」で協議された。遺跡は本来現状のまま保存していくのが最も望ましいことであるが、原村の農業の将来を考えると、農地の整備は必要なことであるうえに、農業者からの強い要望があり「記録保存やむなき」との考えに落ち着き、平成14年度に緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。

しかし、平成14年度に実施した発掘調査の途上で、新たに柏木南遺跡の保護が加わり調査日程等に問題が生じ、計画変更を余儀なくされた。また、前尾根遺跡の発掘対象地は作付けが行われていたうえ山林の伐採には手が付けられないままであり、発掘調査に着手できる状況ではなく、関係機関と協議を行い平成15年度発掘調査実施に変更した。したがって、平成14年10月17日に行われた「平成15年以降実施予定の公共事業等に係る埋蔵文化財等の保護協議」は変更に係る確認を行っている。協議出席者は長野県教育委員会文化財・生涯学習課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者である。

その後も協議を重ね調査日程等の調整を行い原村教育委員会は、国庫および県費から発掘調査補助金交付を受け、また、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託を受け、平成15年6月2日から10月31日にかけて緊急発掘調査を実施した。



第1図 原村域の地形断面模式図（宮川—前尾根遺跡—赤岳ライン）



## 2 調査組織

事務局	原村教育委員会				
	教 育 長	津金 喜勝			
	学校教育課長	佐貫 正憲			
	文化財係長	平出 一治			
	文化財係	平林とし美			
調査団	団 長	津金 喜勝 (原村教育委員会教育長)			
	調査担当者	平出 一治			
	調 査 員	武藤 雄六	平林とし美		
	調査参加者	発掘作業	小島久美子	小島 政雄	小林 明美
			小林 智子	小林 りえ	小松 弘
			坂本ちづる	清水 正進	田中 耕平
			田中 初一	津金たか子	西沢 寛人
		整理作業	上島 淑枝	小島久美子	小島 正雄
			小林 明美	小林 智子	小林 りえ
			小松 弘	坂本ちづる	清水 正進
			田中 耕平	田中 初一	津金たか子
			西沢 寛人		

## 3 発掘調査の経過 (抄)

- 平成15年6月2日 発掘準備をはじめ。
- 19日 上物の片付けについて打ち合わせを行う。
- 23日 テント用地の草刈り、トレンチの設定をはじめ。
- 24日 重機でトレンチの掘削をはじめ。
- 26日 テント設営、機材の搬入、トレンチ内の精査を人力ではじめる。
- 7月4日 上物の片付けについて地元委員会と打ち合わせを行う。
- 8日 遺物集中箇所(遺跡)の表土剥ぎを重機ではじめる。
- 9日 遺物集中箇所(遺跡)にグリッドを設定し、人力で精査をはじめ。
- 8月6日 対象地東端のトレンチの掘削重機ではじめる。
- 18日 対象地北端(上居沢尾根遺跡)のトレンチの掘削重機ではじめる。

- 19日 重機による作業は今日で終了。
- 9月2日 小竪穴101の精査をはじめ。
- 3日 小竪穴101の土層観察と実測を行う。
- 17日 片付けをはじめ。
- 23日 調査を一時中断。
- 10月27日 調査を再開、小竪穴101を重機で截ち割り、底面にうがたれた小穴の精査をはじめ。
- 29日 小竪穴101の調査は終了。
- 31日 片付けを行い、今日で発掘調査は終了。

## Ⅱ 遺跡の位置と環境

前尾根遺跡（原村遺跡番号20）は、長野県諏訪郡原村柏木区の東方1 kmほどの八ヶ岳西麓に位置する。この辺りには当地方に特有な東西に細長く伸びる大小様々の尾根がみられ、尾根上から南斜面には第2図と表1に示したように、縄文時代を中心とする数多い遺跡が埋蔵されている。それらの遺跡は県営圃場整備をはじめとする開発事業ですでに消滅したものも多いが、事前の発掘調査で数多い土器や石器をはじめ縄文時代と平安時代の住居址や小竪穴などを発見している。

付近の集落遺跡をあげると、第2図11の阿久遺跡（国史跡）、9の比丘尼原遺跡、21の上居尻尾根遺跡、19の南平遺跡、22の清水遺跡、53の雁頭沢遺跡などがあり、大規模遺跡が群集している地域である。その一つである本遺跡は、八ヶ岳から流下する大早川と小早川にはさまれた尾根上から斜面に立地する。標高は950m前後を測り、地目は地下水が低いこともあり普通畑・山林・宅地で、昭和30年代に深井戸で開発された水田が一部みられる。調査地点は尾根の北斜面に位置し、地目は普通畑と山林であった。

これらの尾根筋は西方1,000mほど先でフォッサマグナの西縁である、糸魚川—静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られている。

本遺跡はすでに5次にわたる発掘調査を実施しているが、遺跡名は柏木上尾根遺跡（諏訪史 第一巻）、上前尾根遺跡と呼称した時があり、昭和54年度に長野県教育委員会で実施した「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査」の折り、同一遺跡を別々の遺跡名で呼び混乱していたものは整理した。本遺跡は「前尾根遺跡」に改めたが、未だ上前尾根遺跡とは違う遺跡と思っている人が多いため、ここでも改訂しておきたい。

第1次調査は、村内における開発に係る初期の調査で、昭和44年度にリンゴ園の給水管敷設工事に先立ち実施し、縄文時代中期の住居址2軒を発見した。前述した昭和30年代の



第2図 前尾根遺跡の位置と周辺遺跡

表1 前尾根遺跡の位置と周辺遺跡一覧

○は遺物発見 ◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文					弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後							
1	家裏	○				◎	○				◎		茅野市地籍に展開 昭和59年度発掘調査	
2	大久保前									○			昭和54年消滅	
3	向尾根	○				○							昭和54年度発掘調査 消滅	
8	比丘尼原北		○	○						◎			平成10・13・14年度発掘調査	
9	比丘尼原					◎				◎			平成8・13年度発掘調査 消滅	
10	柏木南	○				○◎				○			昭和51・平成14年度発掘調査	
11	阿久		○	◎	◎	○				◎	○		国史跡 昭和50・51・52・53・平成5・7・11・12・13年度発掘調査	
12	前沢					○◎				◎		○	昭和55・61・平成10・11年度発掘調査	
13	長峰		○			◎	○			◎		○	平成3年度発掘調査 消滅	
14	裏長峰	○	○			○				◎			平成4年度発掘調査 消滅	
15	程久保		○			◎				◎		○	平成4・5年度発掘調査 消滅	
17	白ヶ原		○	○		○				○			昭和53・平成10年度発掘調査	
18	前尾根西					○								
19	南平		○			◎					○		平成9年度発掘調査 消滅	
20	前尾根					○◎◎				◎	○	○	昭和44・52・53・59・平成9・15年度発掘調査	
21	上居沢尾根					◎	○				○	○	平成4年度発掘調査	
22	清水		○	○		◎	○			◎	○		平成8年度発掘調査 消滅	
23	恩膳西	○	○			◎				◎	○		昭和62・平成5・6年度発掘調査	
24	恩膳		○			◎	◎			○			昭和62年度発掘調査	
25	裏尾根		○			○				◎			平成8・10年度発掘調査	
26	家下					○				○		○	昭和59・平成9年度発掘調査	
27	關盧沢					○				○	○		昭和62・平成9年度発掘調査	
28	宮平									○	○		村史跡	
42	居沢尾根	○	○	○		◎	○			◎			昭和50・51・52・56・平成6・11・12年度発掘調査	
43	中阿久					○						○	昭和51年度発掘調査	
44	原山					◎				○				
45	広原日向	○				○				○			昭和58年度発掘調査	
46	宿尻	○	○			◎	○			◎			平成5・6年度発掘調査 消滅	
47	ヲシキ		○	○		○				◎			昭和51・平成10・11年度発掘調査	
48	楡の木					◎				○				
49	大石	○	○	◎		◎				◎		○	昭和50・平成9・10・13年度発掘調査	
50	山の神					◎	◎			○			昭和54・平成13年度発掘調査	
51	姥ヶ原					○	◎						昭和63・平成元・15年度発掘調査	
52	水掛平					○	○			○	○		平成7・8年度発掘調査	
53	雁頭沢					◎				○		○	昭和54・57・63・平成4・5・9・10・13・15年度発掘調査	
54	宮ノ下		○			○				○	○	○	昭和57・58年度発掘調査	
55	中尾根					○◎	○			◎		○	平成6年度発掘調査	
56	家前尾根					◎◎				◎		○	平成6年度発掘調査	
57	久保地尾根					◎							昭和5・平成6・7・8・13・14年度発掘調査	
58	判の木					○				○				
87	下原山南		○			◎				○			昭和63・平成元年度発掘調査	
88	下原山北		○			◎	○			○			昭和63・平成元年度発掘調査	
93	大石西		○	○						○			平成2年度発掘調査	
95	土井平									◎			平成4年度発掘調査 消滅	
98	白ヶ原西									○			平成10年度発掘調査 消滅	
101	白ヶ原南		○			◎	○			◎			平成10・11年度発掘調査 消滅	



第3图 発掘調査区域図・地形図



水田造成によって生じた地層断面の観察で住居址5軒を確認している。

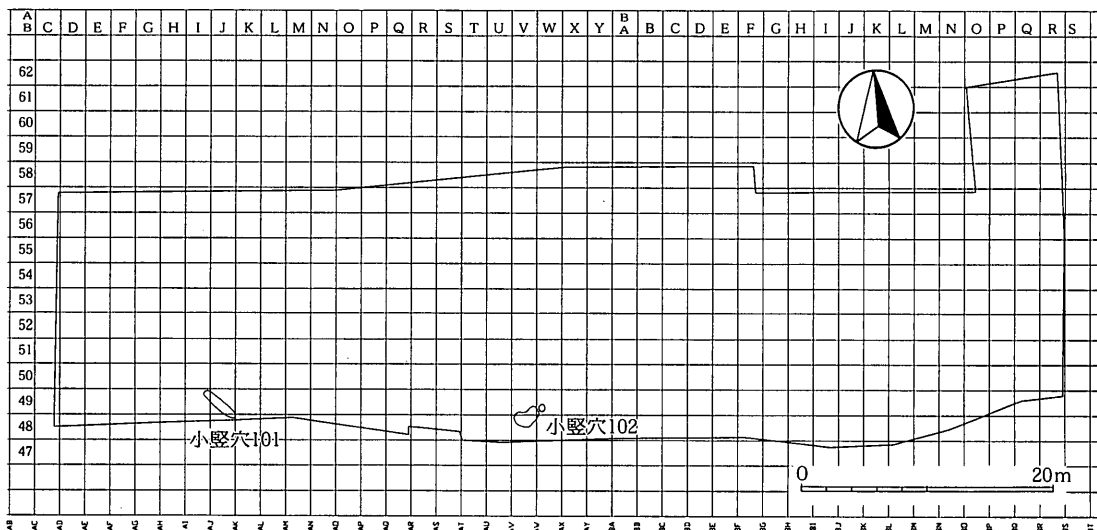
第2次調査は、昭和52年度に村道前尾根線改良工事に先立ち実施し、道路幅という限られた範囲の調査であったが、顔面付釣手土器をはじめ土器・石器・住居址には目を見張るものが多く、前尾根遺跡の重要性が明らかになった。やはり村道前尾根線改良工事に先立ち第3次調査は昭和53年度、第4次調査は昭和59年度に実施した。

第5次調査は、平成9年度に県営圃場整備事業原村西部地区に先立ち実施したが、縄文時代中期の竪穴住居址、後期の敷石住居址、平安時代後期の竪穴住居址、近世の墓塚を発見し、縄文時代、平安時代、中世、近世の複合遺跡であることが明らかになり今日に至っている。

前述したように第1～3次調査は遺跡名を上前尾根遺跡、第4次調査からは前尾根遺跡と呼称している。

### Ⅲ 調査と層序

発掘調査の対象は、第3図に示した県営圃場整備事業原村柏木地区の全域にわたるが、北斜面で傾斜は強く居住域とは考えられない立地で、事前の踏査で数多い土器破片を採集した。遺跡の北斜面でしばしば見られる遺物集中箇所（廃棄場）の埋没が想定できるものであった。したがって遺物の出土状況を把握する必要があり、傾斜方向に軸を合わせたトレンチを設定し重機で掘削したが、トレンチ幅は重機のバケット幅の1.2mである。引き続き人力でトレンチ内の精査を行い、遺物の出土状況を確認し面的調査範囲を決定した。



第4図 遺構位置図・グリッド図

遺物は広範囲から出土したが、集中範囲の表土は重機で剥ぎ、面的調査範囲はトレンチに軸を合わせた2×2 mのグリッドを設定した。調査は人力で進めたが、遺物の埋没状況の観察と取り上げを繰り返し、ローム層直上ないしは遺物が発見できなくなった時点で調査は打ち切った。遺物はトレンチ調査はトレンチ別、面的調査はグリッド別に取り上げた。同時に遺構の検出も行ったが、調査地区南外れの尾根肩部で小竪穴2基を発見しただけである。

小竪穴101は検出時の埋土の状況、規模、平面プランから中世の陥し穴と把握できた典型的なもので、短軸方向で土層観察を行い。記録・実測作業終了後、長軸方向を重機で半裁し底部に穿たれていた小穴の観察と実測を行った。

遺物の取り上げはトレンチ調査ではトレンチ別、遺物集中箇所の面的調査はグリッド別に行った。ちなみに調査面積は2,862m<sup>2</sup>である。

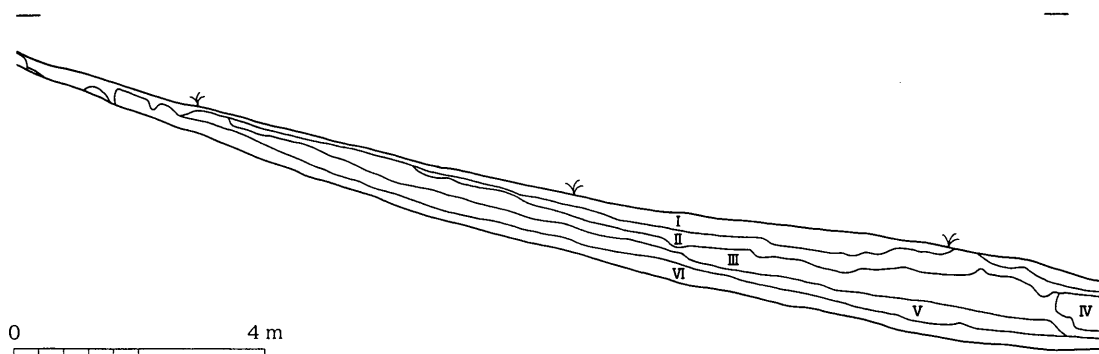
座標値をもたせた基準点の設置は株式会社両角測量に委託し、実測の一部は株式会社写真測図研究所に委託した。

面的調査地区西端の土層を第5図に示したが、傾斜が強いため高所は土流失が多かったようでロームを耕作土にしている状態であり、低くなるに従い堆積が厚くなり土層は安定していなかった。大まかな観察結果は次の通りである。

第Ⅰ層 ローム粒混じりの褐色土・黒褐色土層 畑の耕作土であるが傾斜が強いこともあり、土流失・流入が著しかったようで、高所はロームを耕作土にしているが、低くなるに従って黒色は増し色調は異なっている。

第Ⅱ層 黒褐色土層 古い耕作土で、ローム粒・石灰が混じる。第Ⅰ層より固くしまり、やはり低くなるに従い黒色は増す。

第Ⅲ層 黒色土～真黒色土層 やはり傾斜のため色調は一様ではなく、低くなるに従い黒色が増している。上半部に遺物が多く包含されていた。



第5図 土層図

第Ⅳ層 礫混ローム層 握り拳位の礫混じりのロームで、水田造成の折に持ち込まれた水田の地床土である。

第Ⅴ層 ローム漸移層。

第Ⅵ層 ローム層。

## Ⅳ 遺構と遺物

発見した遺構は、小竪穴2基と遺物集中箇所（廃棄場）1と少ないが、小竪穴は面的調査地区南外れの尾根肩部付近からの検出で、尾根上と考えてもよい所である。

### 1 小 竪 穴

#### (1) 小竪穴101（第4・6図、写真図版3・4）

面的調査地区南外れの尾根肩部でロームに黒色土の落ち込みを検出した。地山のロームがこの辺りから小早川へ急激に落ち込みはじめその傾斜は強く、調査を進める過程で足場に苦慮するほどであった。検出時の埋土はローム粒混じりの黒色土で、平面プランと規模から中世末から近世頃の陥し穴と考えることができる特徴的なものである。

平面形は310×72cmの長楕円形を呈し、深さは88～117cmで、底面には小穴が一行に6個穿たれている。底面の水平を意識することはなく自然傾斜同様に傾き、深さを必要とした施設であることが理解できる。北壁はほぼ垂直に立ち上がり構築時の姿を残し、他の壁も底近くでは構築時の姿をとどめていた。その上は容易に壁土の落下を窺い知ることのできる状態に広がり、構築時は北壁同様に立ち上がっていたようである。

北壁はその全面に、南壁は底から18cm位までに掘削痕が認められ、東壁と西壁は、北壁と南壁で観察した掘削痕の上端を結んだ線より下で認められたが、これは北壁の上部を起点としたほぼ水平線にあたり、壁土の落下がはじまる以前の短期間にここまでが埋まり、その後、壁土の落下を伴いながら埋没したことを物語っている。

底面に穿たれた小穴は、調査最終段階に重機で截ち割り観察を行い、先端を角錐状に鋭く尖らせた丸太材を打ち込んだ痕であることを確認した。

発見した遺物は、土器破片6点と黒曜石の剥片1点がある。土器は縄文時代中期中葉で、埋没する過程で流入したものと思われる。

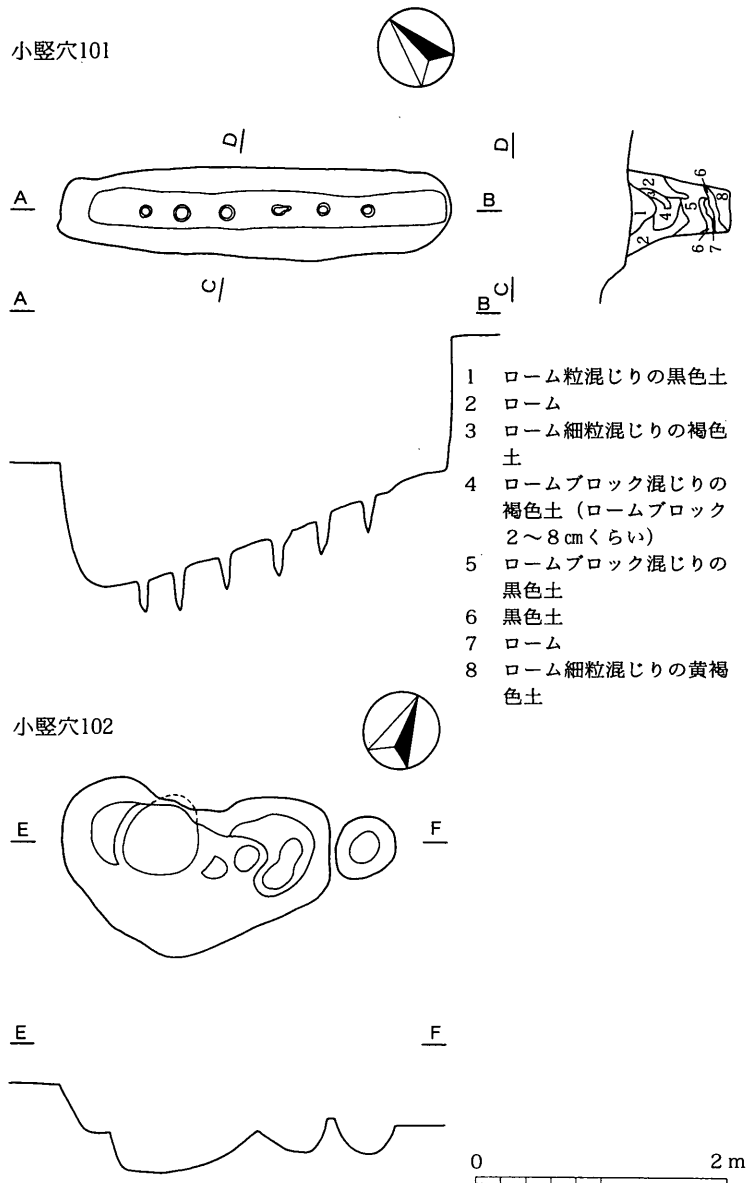
小竪穴は、形態の特徴と鉄器を使用した逆茂木の打ち込みは、原村の南平・關盧沢両遺跡の小竪穴に酷似点し、中世末期から近世初頭頃に構築されたものと思われる。

(2) 小竪穴102 (第4・6図)

小竪穴101の東方でロームに黒色土の落ち込みを認めた。検出地点は比較的緩やかな傾斜であるが、一步離れると急激になり調査を進める上で足場に苦慮するほどであった。

検出時の埋土は単色で、1基の小竪穴を想定し調査を進めた。しかし、数回におよび掘られた大きな穴と小さな穴があり、遺構と考えるより耕作で繰り返し掘られた穴と考えた方がよいものであるが、積極的に帰属時期、性格が明らかにできる資料の伴出はない。

平面形は大きな穴が214×117cmの不整楕円で、底部と思われる平坦面は5箇所を数え、深さちまちで50~81cm、を計る。小さな穴は47×55cmの楕円形で深さは23cmである。ここでは全てを時代不詳の小竪穴としておきたい。



第6図 小竪穴101・102実測図

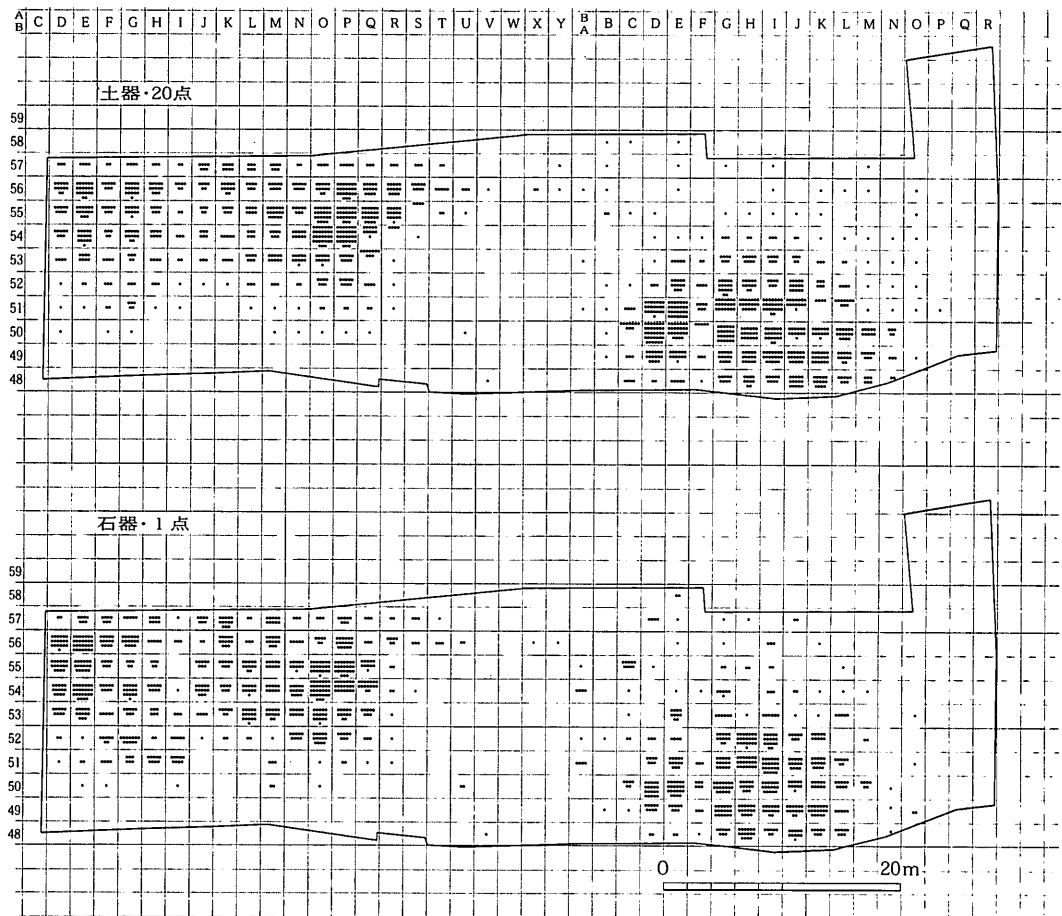
## 2 遺物集中箇所

トレンチ調査で、土器と石器が集中した範囲を、便宜的に遺物集中箇所（廃棄場）と呼び面的調査を進めた。包含層は厚いところで60cmを計るが、下層から住居址や小竪穴を発見することはできなかった。

遺物の出土状態は第7図に示したが、地山のロームに2本の浅い沢状の窪みがあり、埋まる過程で土器や石器が包含されたようで、遺物の集中は窪みによるところが大きいようである。上層の土器ほど新しい傾向にあるが、逆転していたところもある。

### (1) 縄文時代の遺物

遺物集中箇所にて土器、土製品、石器、石製品を発見している。それらの出土数は一様で



第7図 土器・石器出土状況図



はないが、生活用具の全てが廃棄されていたようである。本遺構の性格を明らかにする目的で、定形石器については全てを図示したつもりである。

### 1) 土器 (第8～17図)

土器は、完形もしくは半完形のものではなく破片ばかりで、かろうじて図化できた4点と破片29,428点を数え175点を図示した。出土状況は第8図に示したが、集中傾向はみられるが前述した沢状の窪みによるところも大きいようである。

1～4の4点は破片から器形を復元したもので完形には程遠い深鉢である。1は縄文時代中期中葉の下胴部、2は中期後葉の胴部、3と4は口縁部と下胴部が残存し器高は推定である。3の類似資料はなく時期は不明となるが、胎土・焼成からみて中期後葉と思われる。4は中期末葉である。

5は中期初頭の浅鉢口縁部破片。6～46は中期中葉で、47～55は無文で胎土・焼成から中葉と思われる。49と52は浅鉢の底部破片。56～121は中期後葉、122～164は中期末葉で、165は類似資料がなく帰属時期は不明。165～171は中期最末ないしは後期初頭である。図示することはできなかったが有孔罎付土器破片、釣手深鉢釣手部破片がある。172～174は完成されたミミズク把手の優品で、172は頭頂を欠損している。中期中葉でこの他にも図示できなかったミミズク把手、三角振れ把手などがある。発見した土器は深鉢、浅鉢、有孔罎付土器、釣手深鉢と器種は多い。

短期間の整理作業で時期別土器破片数を示すことはできないが、中期後葉から末葉のものが多いようである。これは本遺跡で発見した住居址数と同様で、当然のことであるが住居址の多い時期は土器の廃棄も多かったようである。

### 2) 土製品 (第17図)

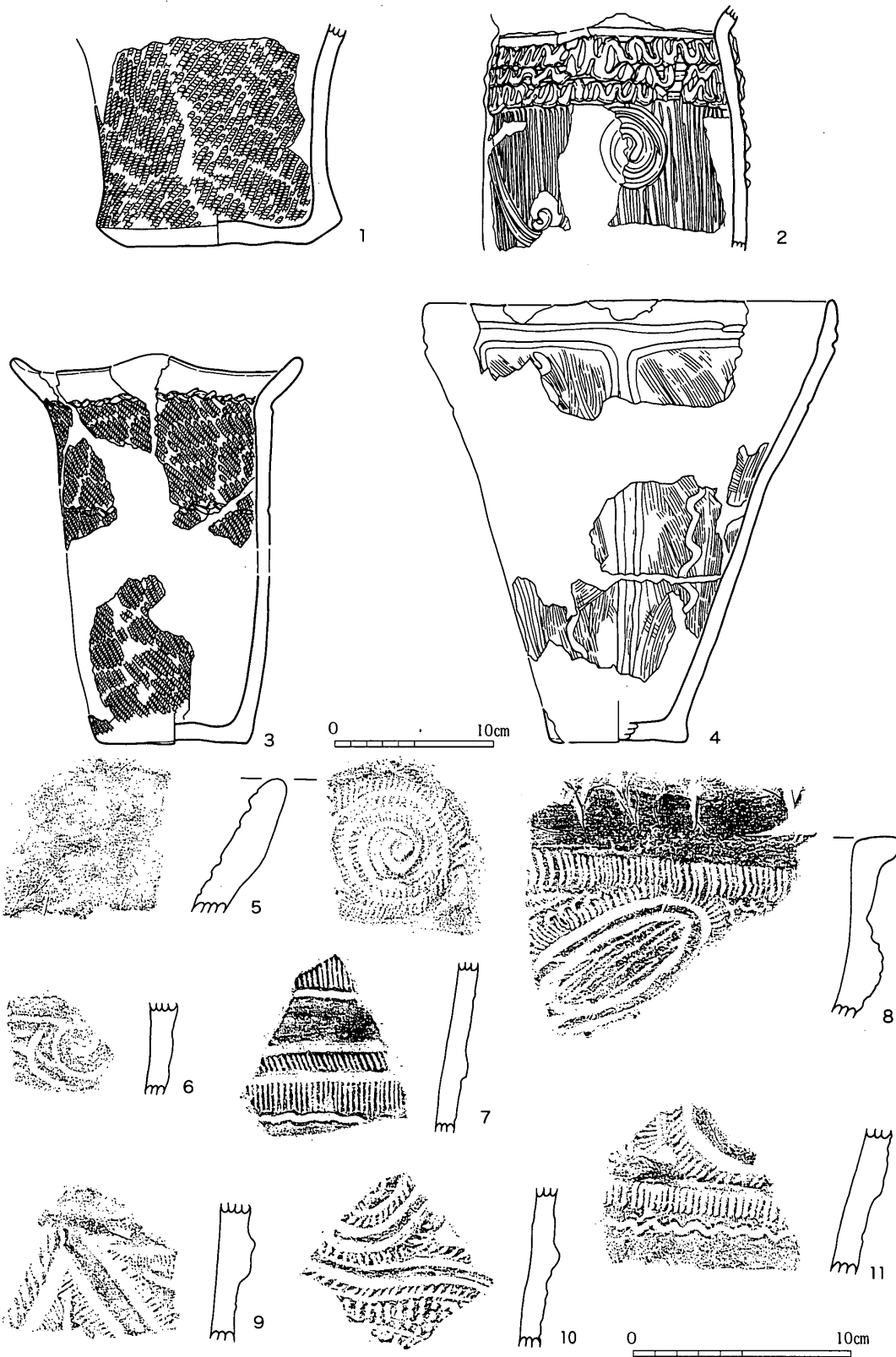
土製品は土偶と土製円盤がある。

#### 土偶 (第17図)

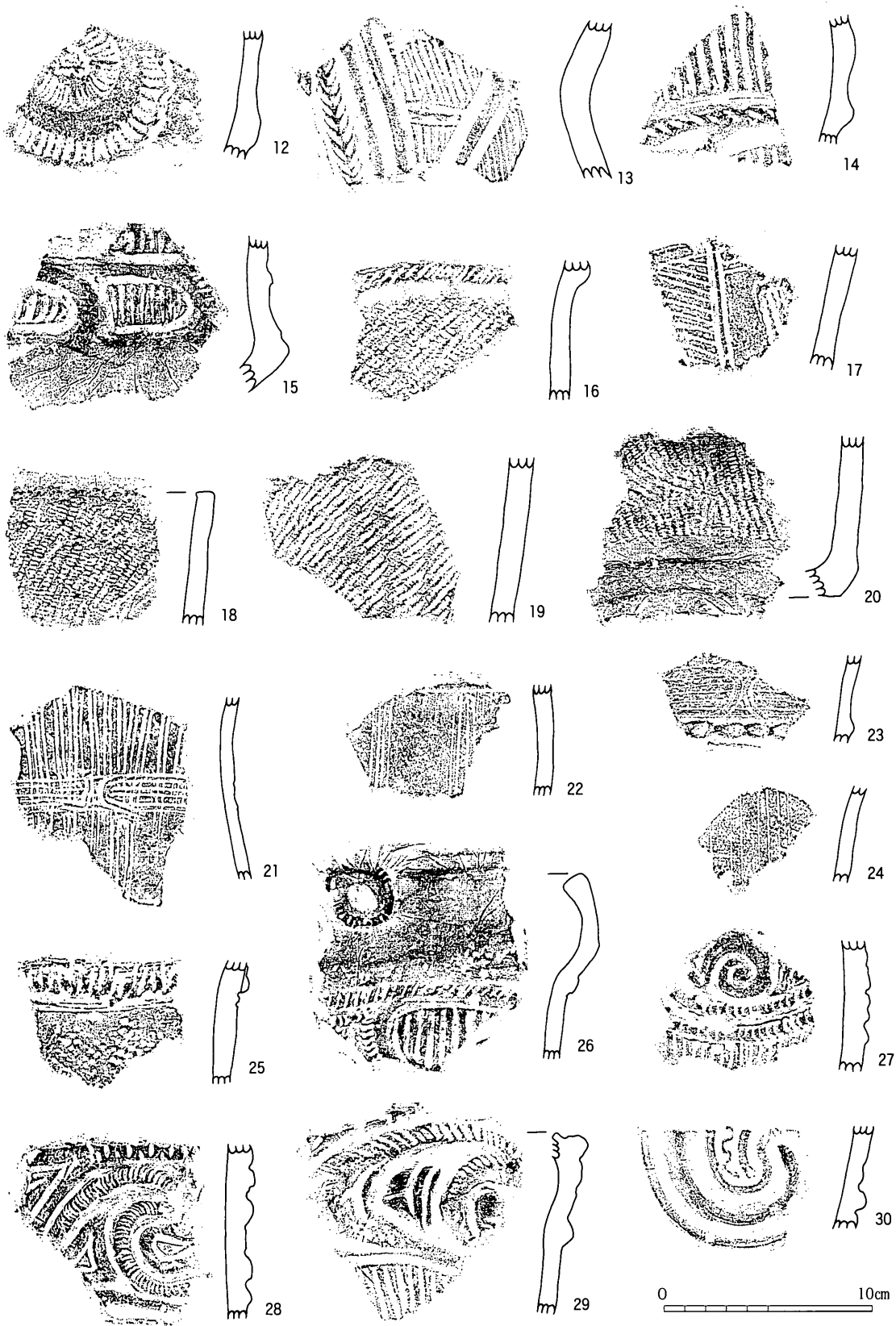
土偶は第17図176の高さ27mm、幅30mm、厚さ24mmの頭部破片1点で、整形はおざなりであり、神顔の額から鼻は剥落し保存状態はよくない。目は額近くに刺突短線で、鼻は残念なことに剥落してわからないが、口は円形の刺突で表現されている。後頭部は丸くふくらみ中期後半の曽利期の所産であろう。

#### 土製円盤 (第17図)

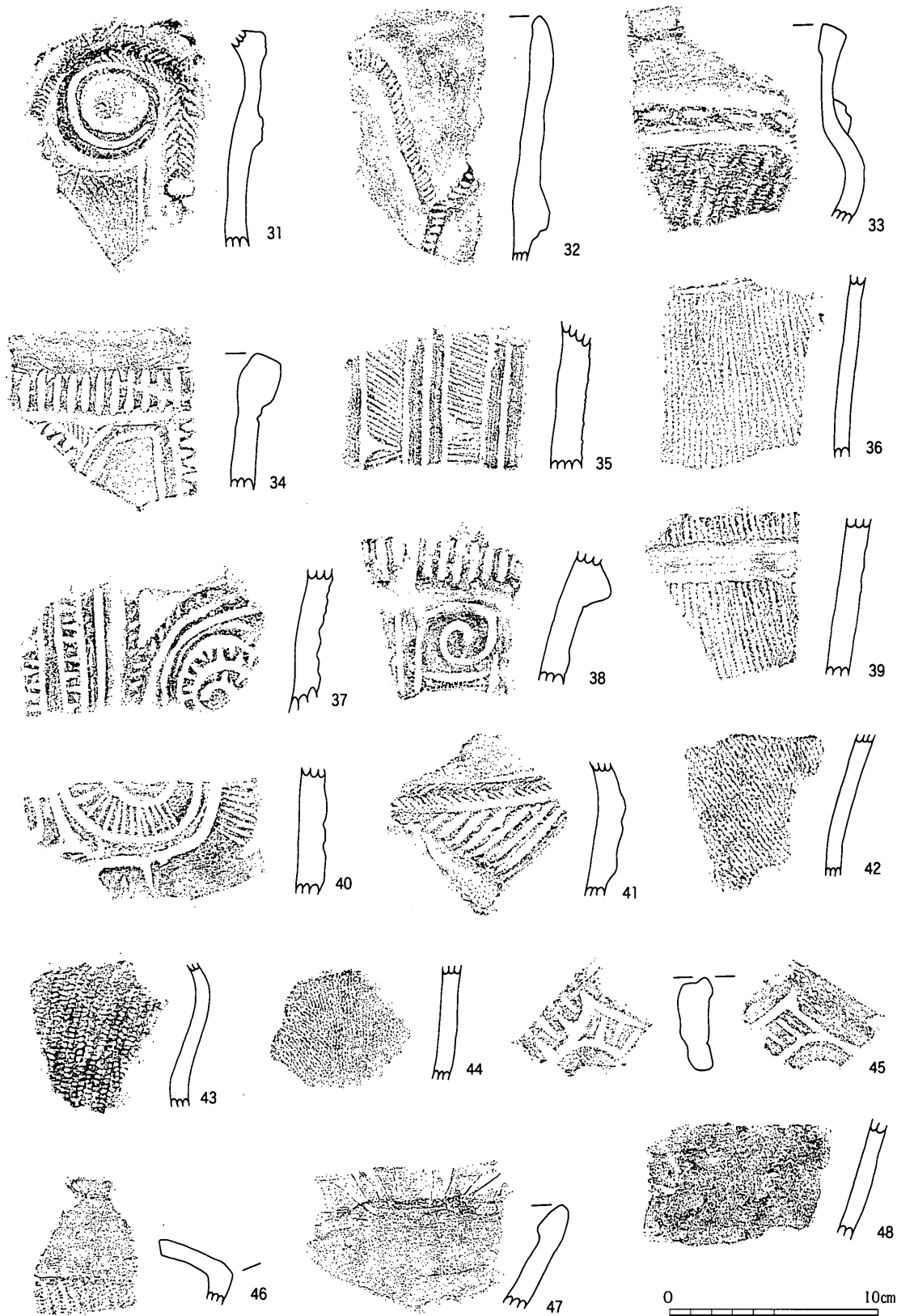
土器片利用の土製円盤は第17図177・178の2点で、深鉢の一部を転用したものである。側面に研磨加工を施し円形に整えてある。無文のため帰属時期を明確に示すことはできない



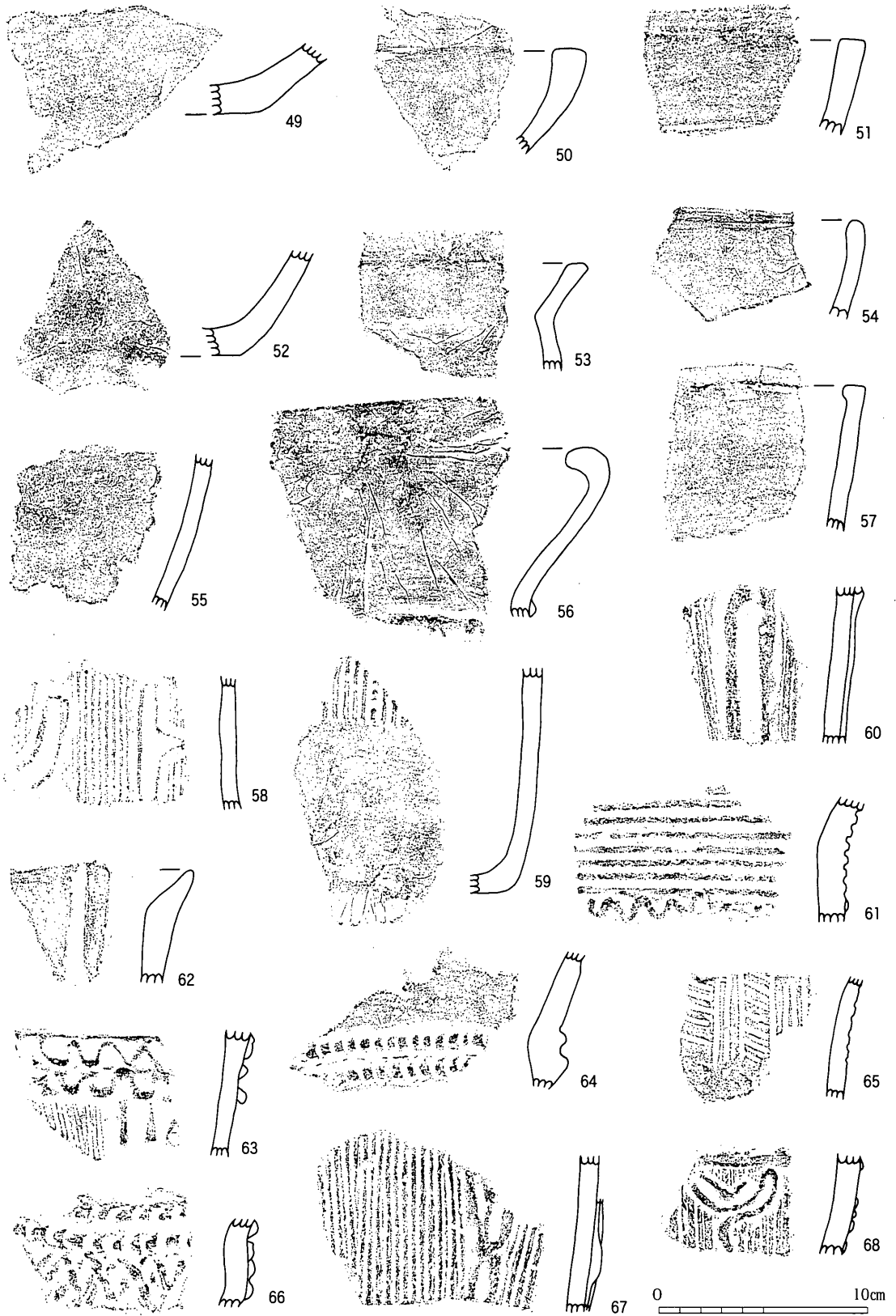
第8图 遺物集中箇処出土土器実測図・拓影 1 1~4 (1:4) 5~11 (1:3)



第9图 遺物集中箇処出土土器拓影2 (1:3)

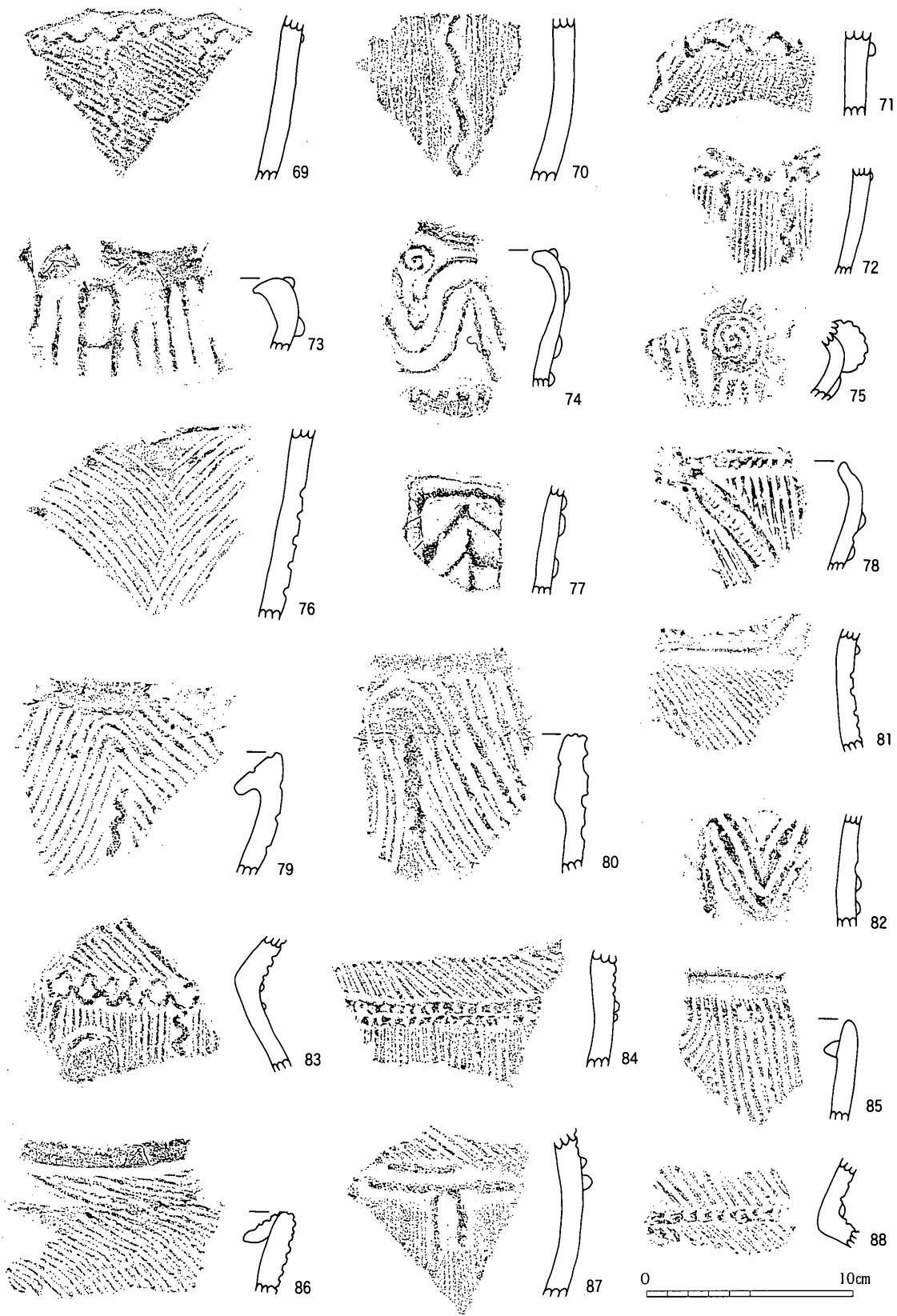


第10图 遗物集中箇处出土土器拓影3 (1:3)

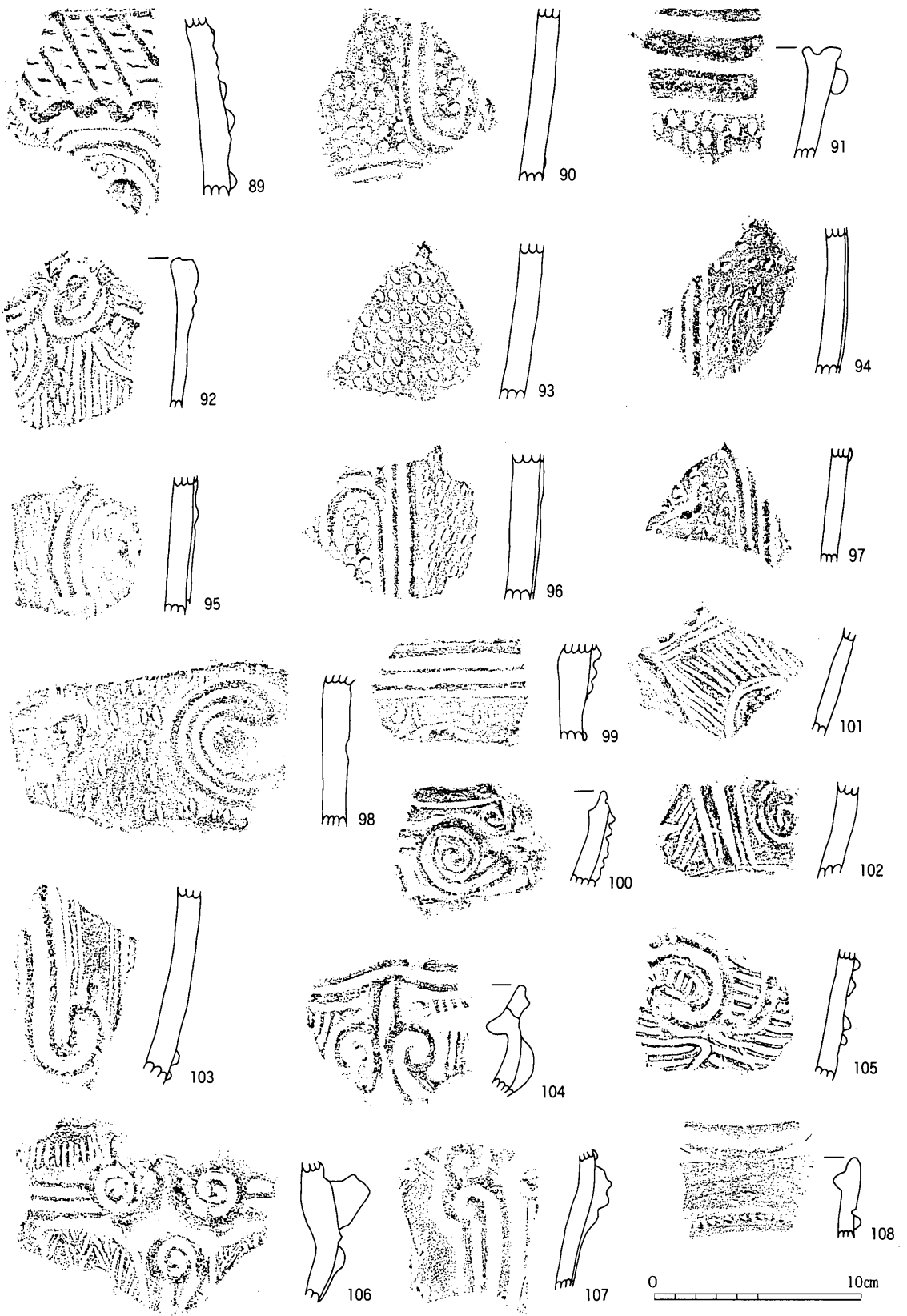


第11图 遗物集中箇処出土土器拓影4 (1:3)

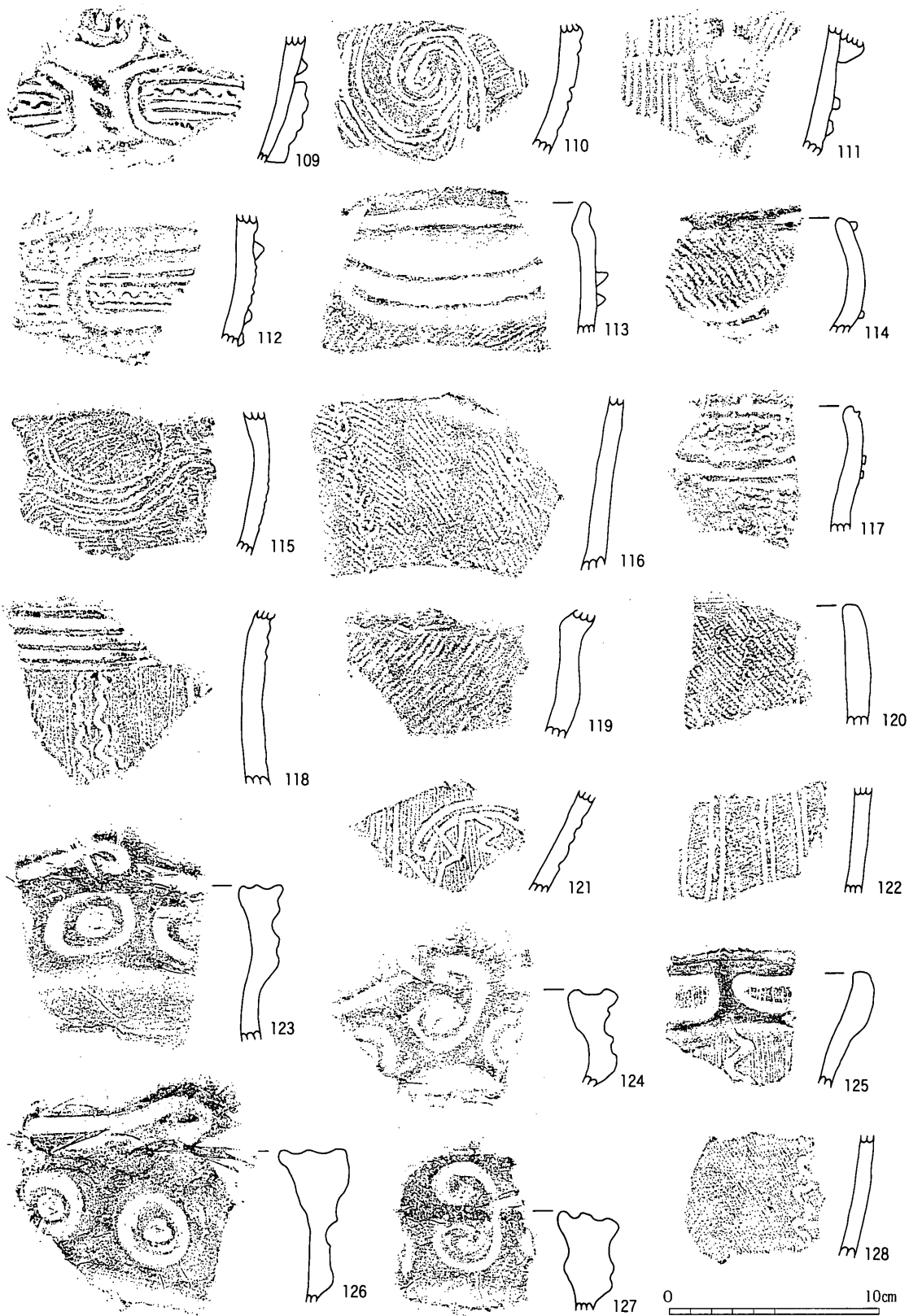




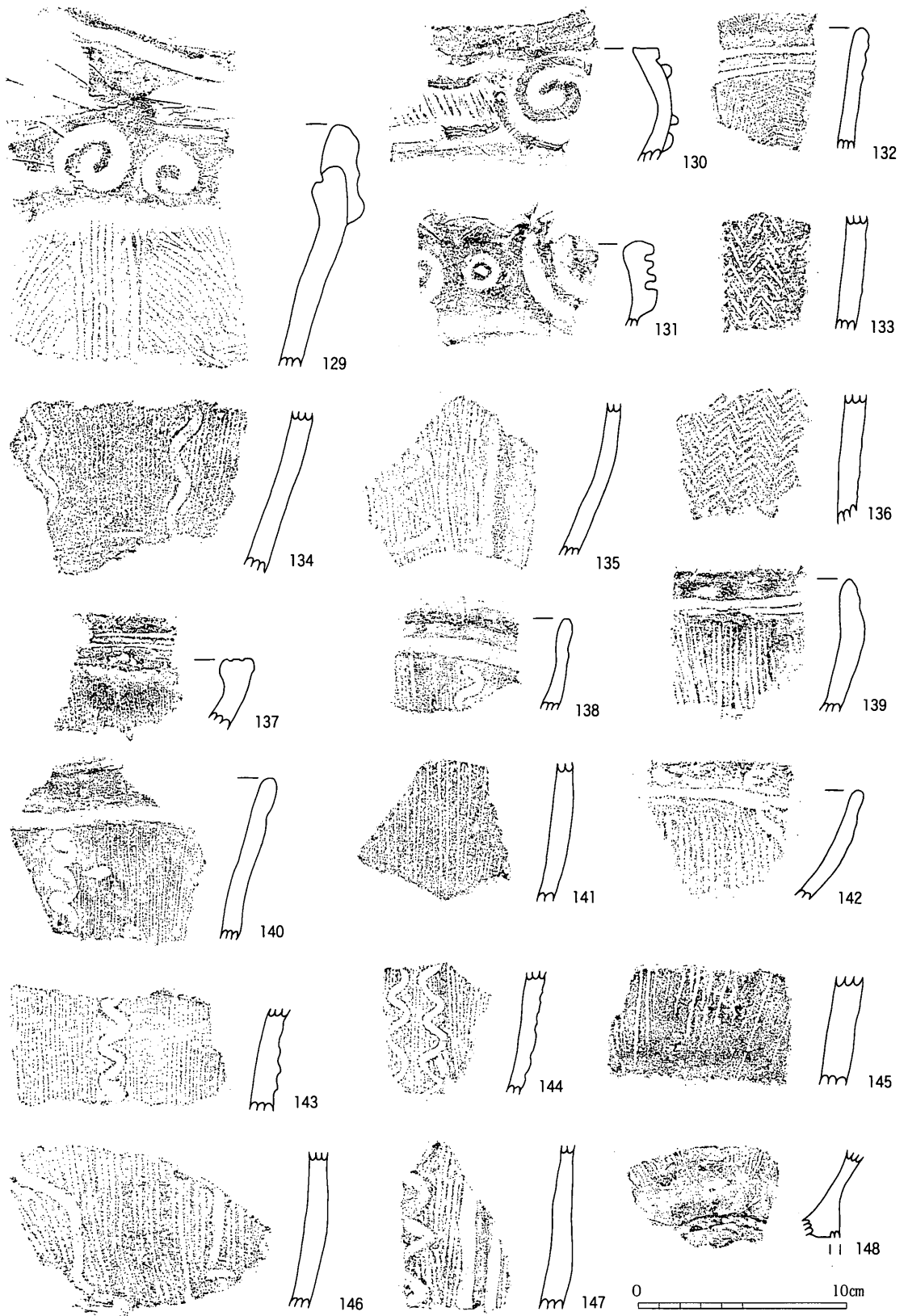
第12图 遺物集中箇処出土土器拓影5 (1:3)



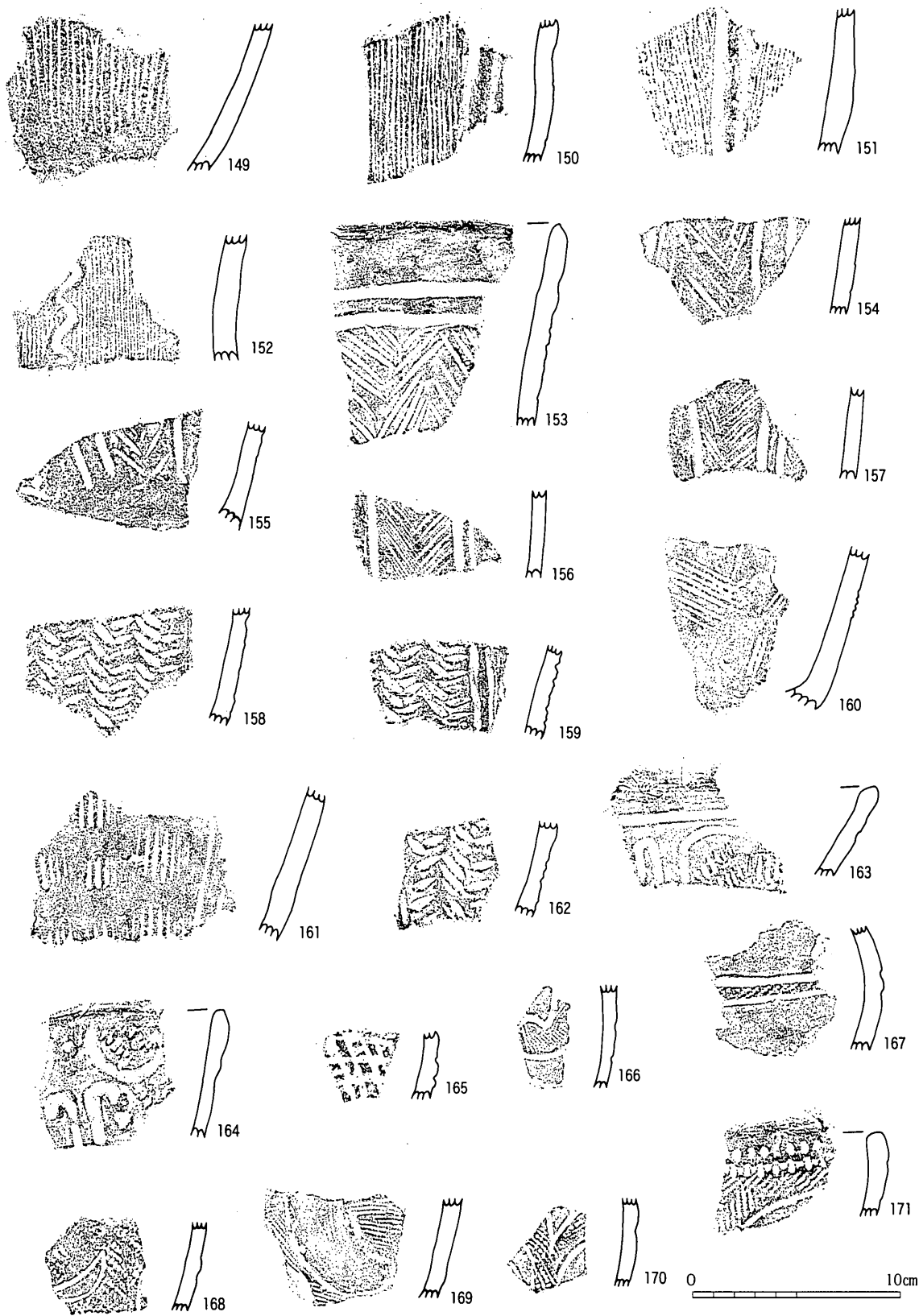
第13图 遗物集中箇処出土土器拓影6 (1:3)



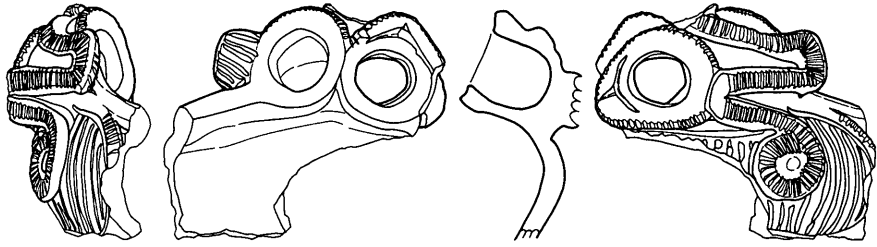
第14图 遺物集中箇处出土土器拓影7 (1:3)



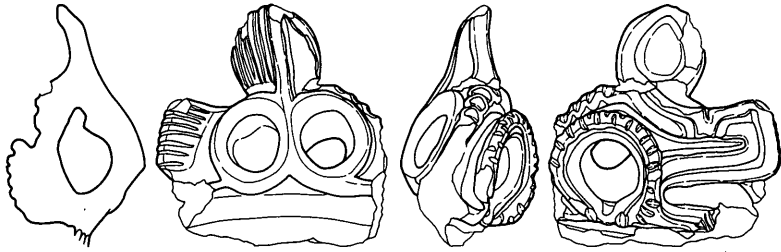
第15图 遺物集中箇処出土土器拓影8 (1:3)



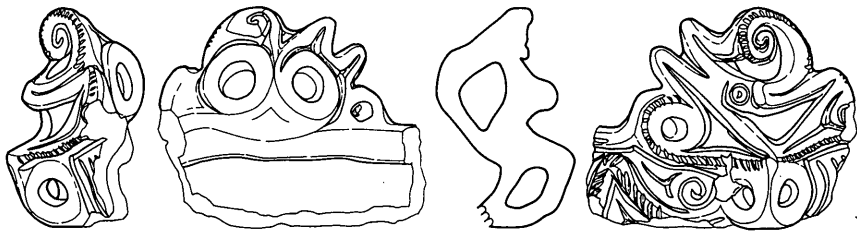
第16图 遗物集中箇处出土土器拓影9 (1:3)



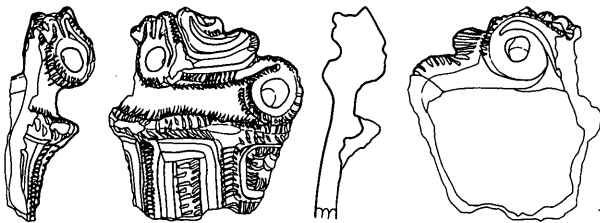
172



173

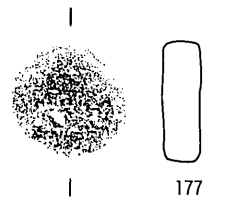


174

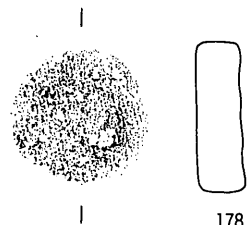


175

0 10cm



177



178

0 5cm



176

第17図 遺物集中箇処出土土器・土製品実測図 172~175 (1 : 4) 176~178 (1 : 2)

いが、胎土と焼成からみて中期中葉と思われる。177は径33×35mm、厚さ9～10mm、重さ15g。178は径43×40mm、厚さ11～14mm、重さ35gである。

### 3) 石器 (第18～42図)

石器は、定形石器、原石、剥片を含めた総出土数は1,563点である。

#### 石鏃 (第18図1～21)

石鏃は1～21の21点で、17はチャート製、1～16・18～21の20点は黒曜石製である。個々の破損状態は表2に示したが、完形品5点(23.8%)、先端欠損2点(9.5%)、脚欠損9点(42.9%)、先端と脚欠損5点(23.8%)である。製作時、使用時のどちらで生じた破損かわからないが、先端と脚を欠損しても僅かなことで使用可能と思われるものがあり、廃棄の要因はわからない。

#### 石錐 (第18図31・32)

石錐は31・32の2点で黒曜石製である。30は完形品で使用可能なものでやはり廃棄の要因はわからない。

#### スクレイパー (第18図22～30)

スクレイパーは22～30の9点を図示した。22～29は黒曜石製で、28は錐としても使用されたかもしれない。30は頁岩製の縦形剥片を素材にしているが、ナイフのように使われたものかもしれない。

#### 磨製石斧 (第18図34、第19図35～39)

磨製石斧は34～39の6点で、残片ともいえる破損品ばかりで定角式磨製石斧、乳棒状磨製石斧、局部磨製石斧を一括してある。34は頁岩製で刃部と基部を欠損する小形定角式磨製石斧と考えたが、諏訪湖周辺では石錘の破損品に分類したいものである。35・36・37は乳棒状磨製石斧で、35は砂岩製で刃部と基部を欠損、36は硬砂岩製で刃部の残片、39は輝緑凝灰岩製で再利用され、厳密には乳棒状磨製石斧とは異なる石器に変わったことになるが、ここでは乳棒状磨製石斧の破損品とした。37・38は輝緑凝灰岩製で2点とも素材は薄く、37は使用による磨滅かもしれない。38は刃部を鋭く作り出した局部磨製石斧である。

#### 打製石斧 (第19図40～55、第20～26図、第27図183～186)

打製石斧は40～186の147点で、完形品と破損品に大別した。完形品は刃部などに僅かな欠損はあっても使用可能なものを含めたためややあいまいになったが40～86の47点(32%)である。破損品の多くは使用中に生じた折れと思われるが次の通り大別した。刃部が残るもの87～123の37点(25%)、基部が残るもの124～160の37点(25%)、刃部と基部を欠損するもの161～186の26点(18%)である。破損品の合計は100点(68%)を数え完形品の2倍

以上で、破損品の多いことがわかる。

石質は表2に示したが、硬砂岩46点(31%)、結晶片岩27点(18%)、フォルンフェルス25点(17%)、砂岩18点(12%)、スレート10点(7%)、輝緑凝灰岩6点(4%)、粘板岩4点(3%)、頁岩3点(2%)、千枚岩3点(2%)、変性岩3点(2%)、輝岩1点、緑色岩1点である。

#### 横刃形石器(第27図187~200、第28図)

横刃形石器は187~212の26点で、この石器は完形品と破損品の判別が極めて困難であるため、ここでは完形品と考えておきたい。

#### 石匙(第29図)

石匙は213~229の17点で、213・217はチャート製で、217は縦形としたが刃部の位置から横形の可能性もある。214~216・218~229はいわゆる粗製石匙で、218・221は刃部に再加工がみえる。225・228は刃部を欠損するが、破損品はこの2点だけである。

#### 凹石・磨石・叩き石(第30~43図)

凹石は230~312の84点で、内2点が接合し個体数は83点である。片手で握ることのできる重さ120~1025gの安山岩の自然礫を利用し、300~550gのものが多い。凹穴は全て叩き痕で、実測図でみるように、浅いものから深いものまでまちまちで、単独、複数が独立しているもの、複数が接し連続するもの、一見1穴にみえるが複数が群集するものなどまちまちである。凹穴が穿たれた面数にも違いがあり、1面19点、2面42点、3面13点、4面9点で、309のように素材が三角錐状のため4面全てを使用したものもみられた。多いのは表と裏の2面を使用したものである。破損品は235と298の2点だけで、298は2点が接合したが火熱による破損である。308は一見破損品にみえるが、破損面の観察と凹穴の位置からポッキリ折れた棒状の礫を素材とした完形品である。完形品は使用可能なものばかりで、廃棄の要因となった共通点は見当たらない。

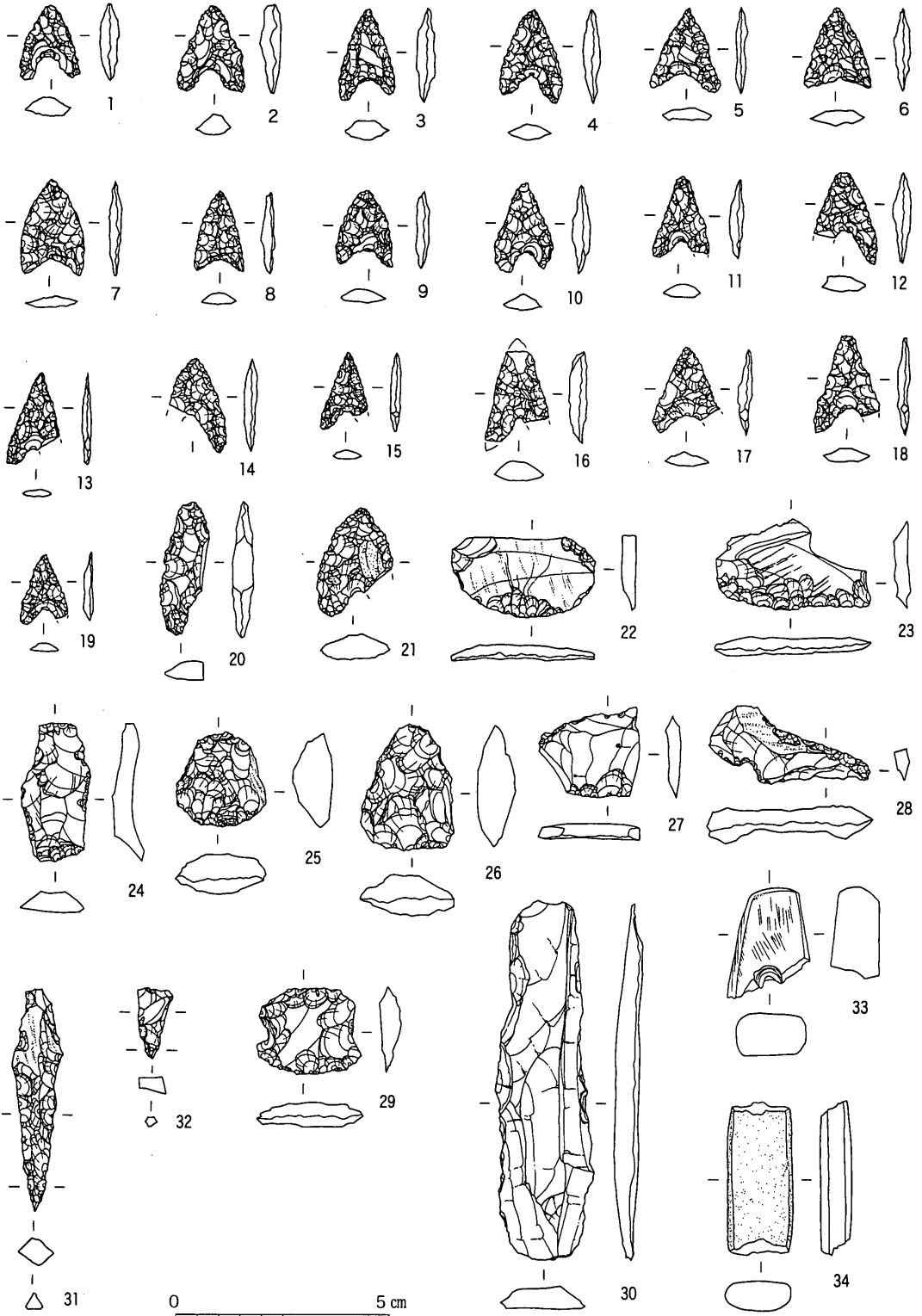
磨石は313・314の2点で、やはり片手で握ることのできる安山岩の自然礫を利用したものである。凹石を磨石に共用した可能性は高いが、ボロボロしたものばかりで使用痕が顕著に観察できたものはない。

叩き石は315・316の2点、凹石と共用の268・310・312の3点の計5点である。315は輝緑凝灰岩製、316はミカブ緑色岩製である。

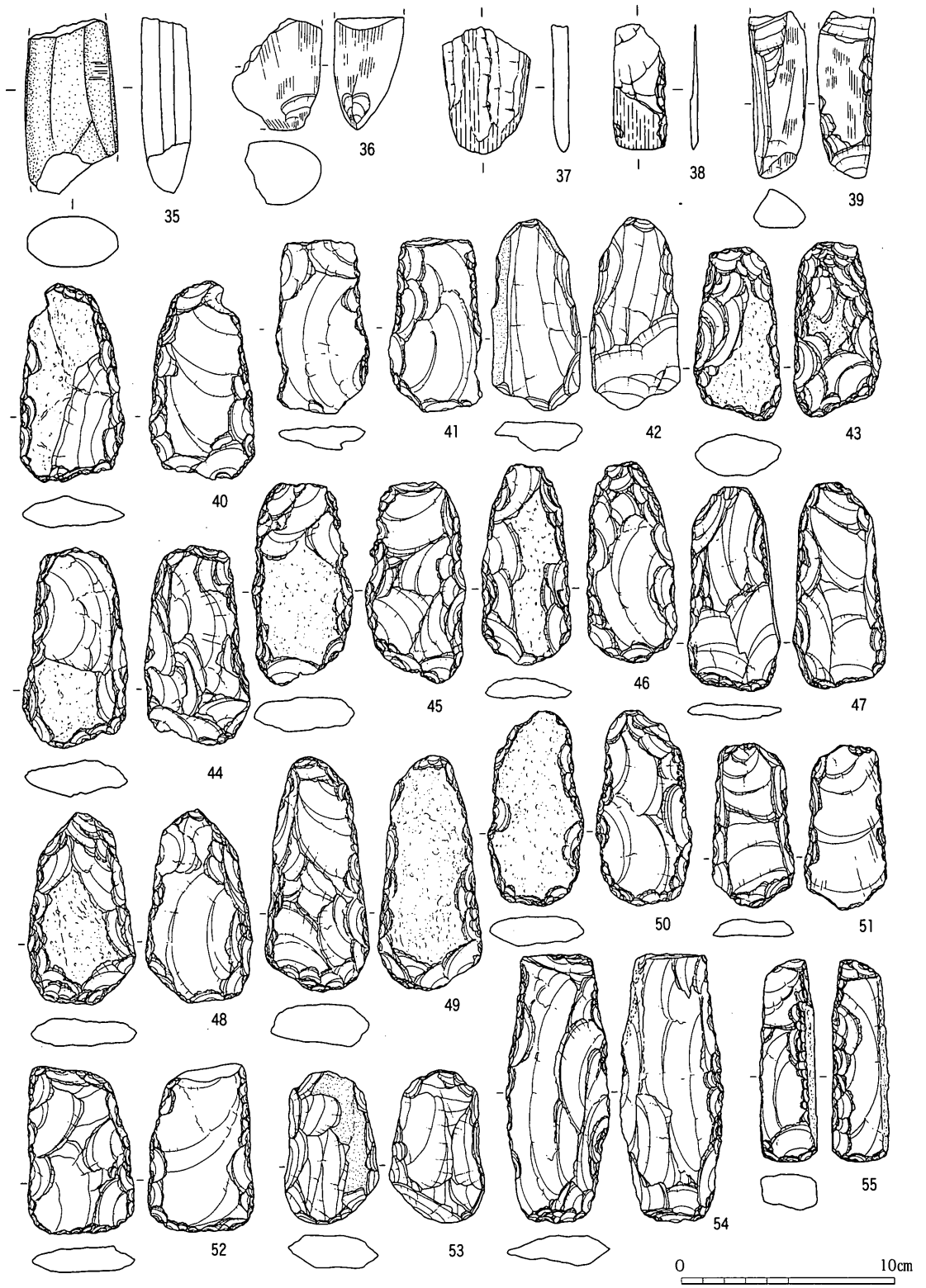
#### ピース・エスキーユ、使用痕ある剥片、原石

図示できなかったが、剥片の多くはピース・エスキーユであり、使用痕の認められるものも多くみられた。

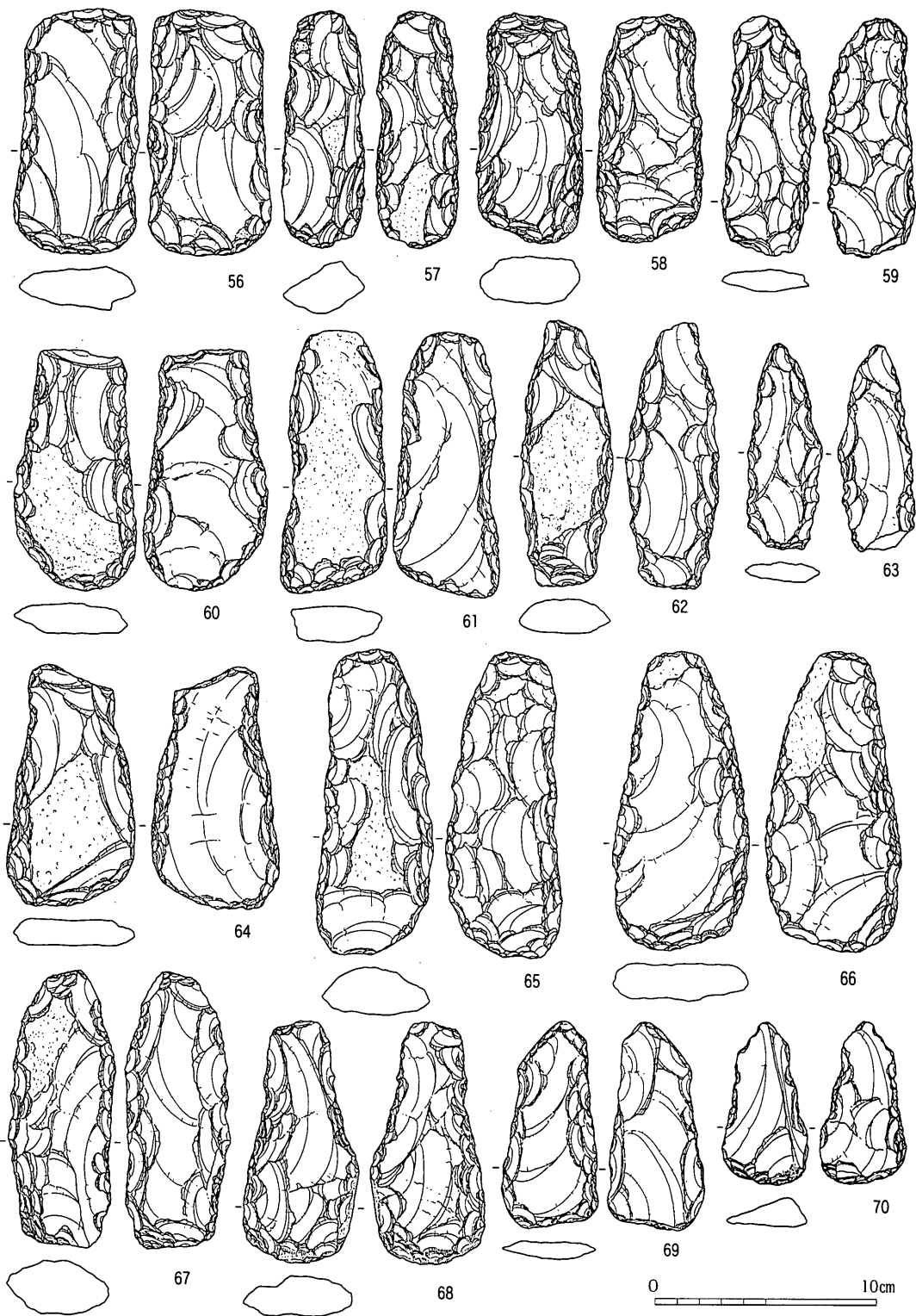




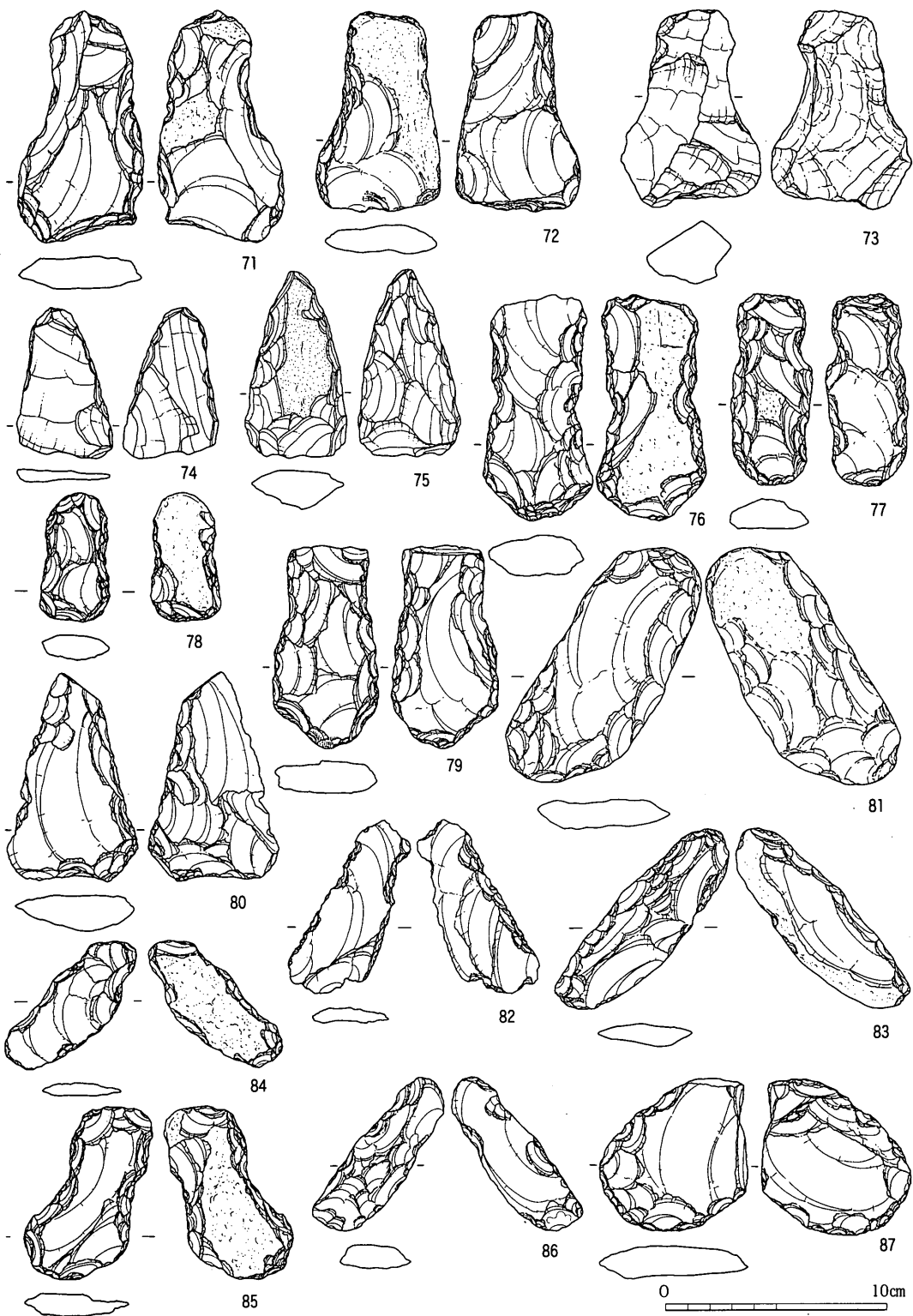
第18图 遺物集中箇処出土石器実測図1 (2:3)



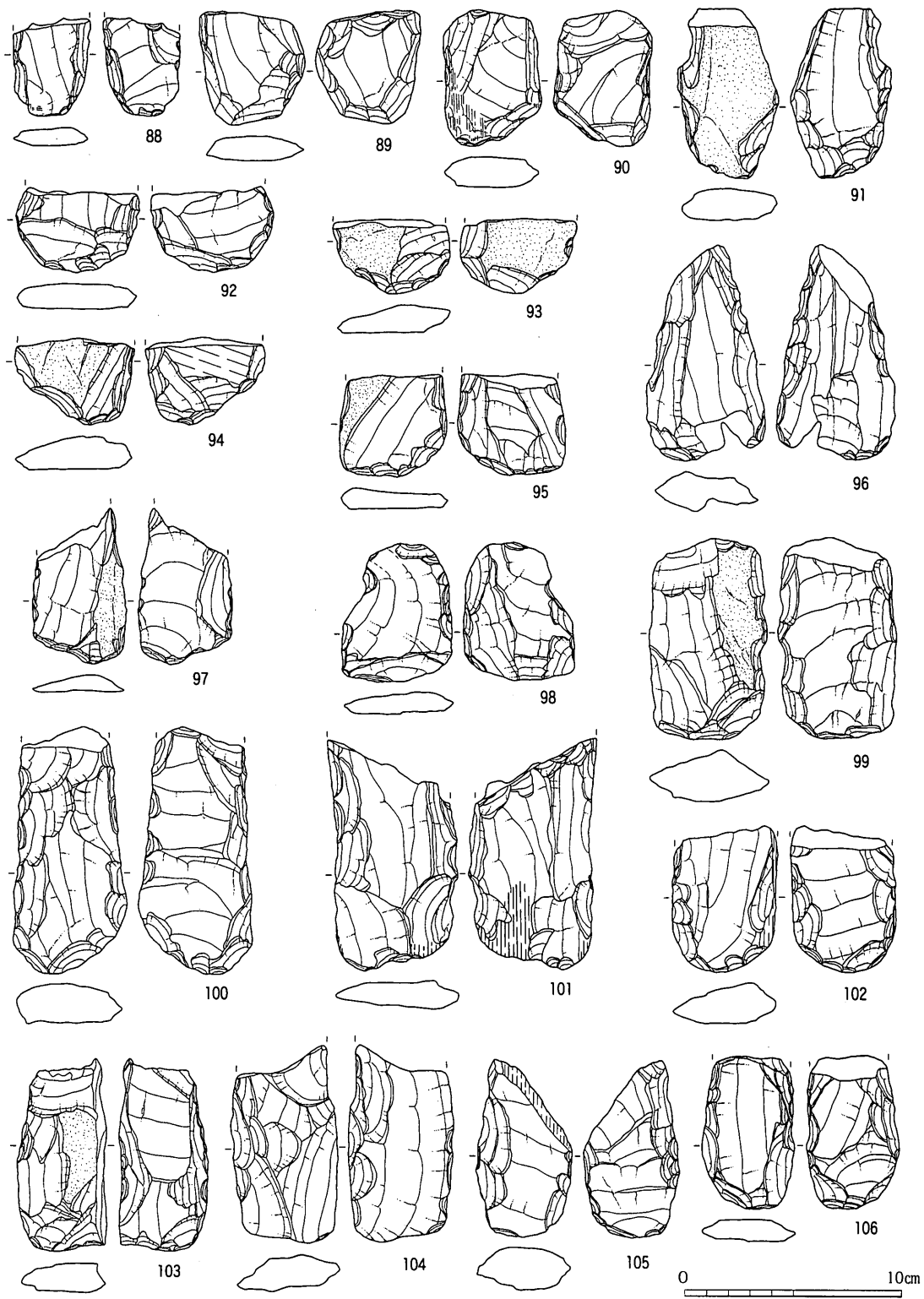
第19图 遺物集中箇処出土石器実測図2 (1:3)



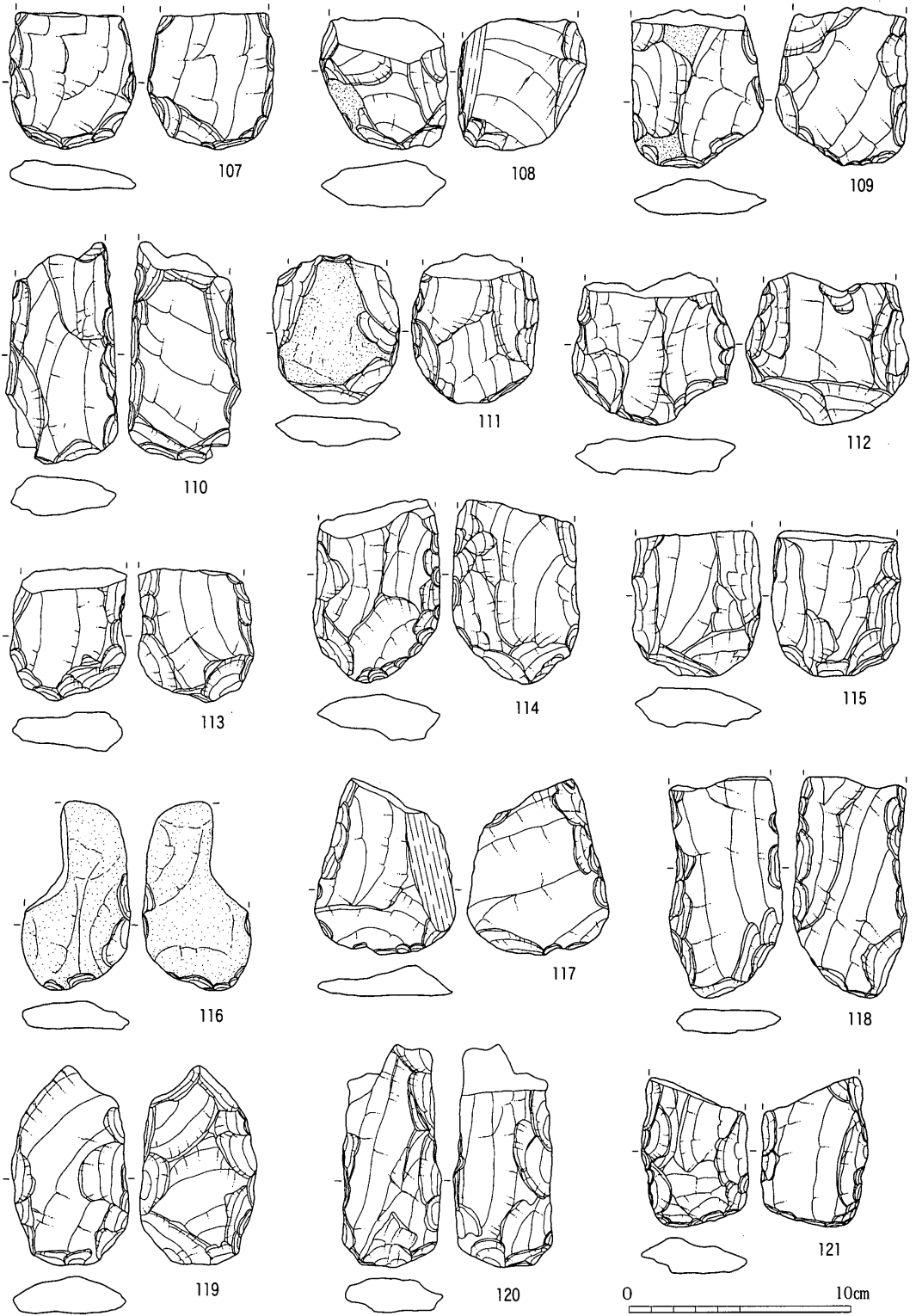
第20图 遗物集中筒处出土石器实测图3 (1:3)



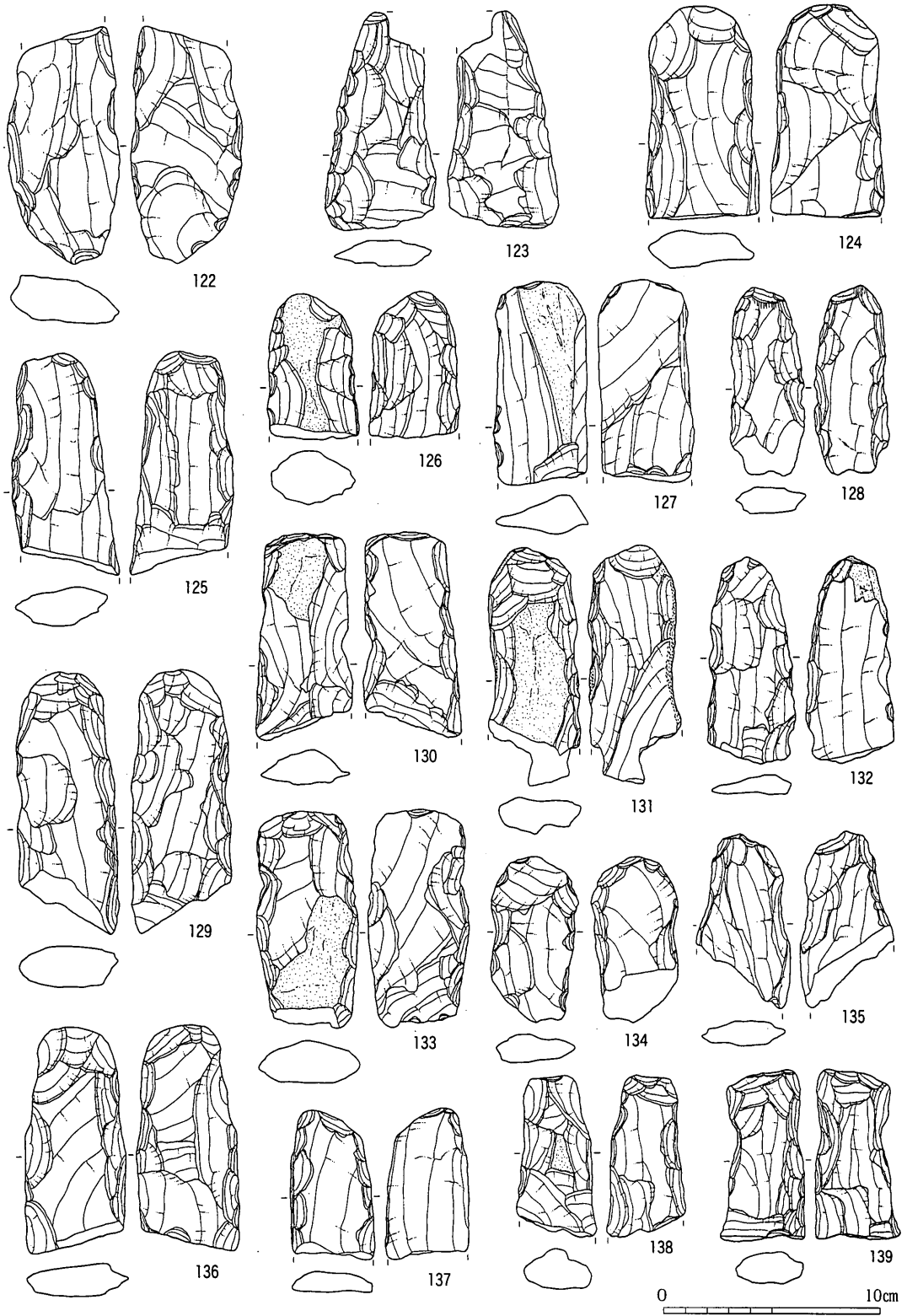
第21图 遺物集中箇処出土石器実測図4 (1:3)



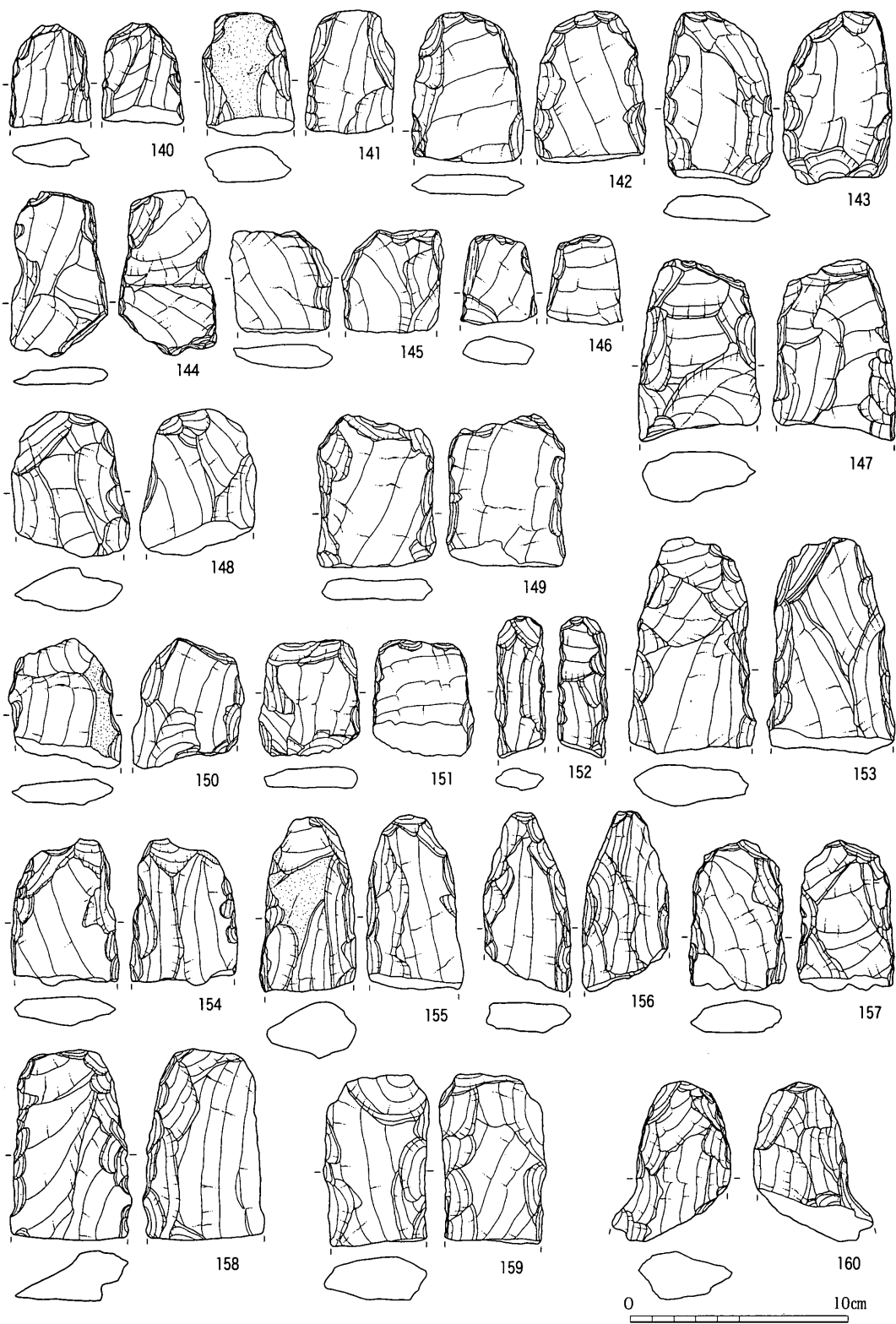
第22图 遺物集中箇処出土石器実測図5 (1:3)



第23图 遺物集中箇処出土石器実測図6 (1:3)

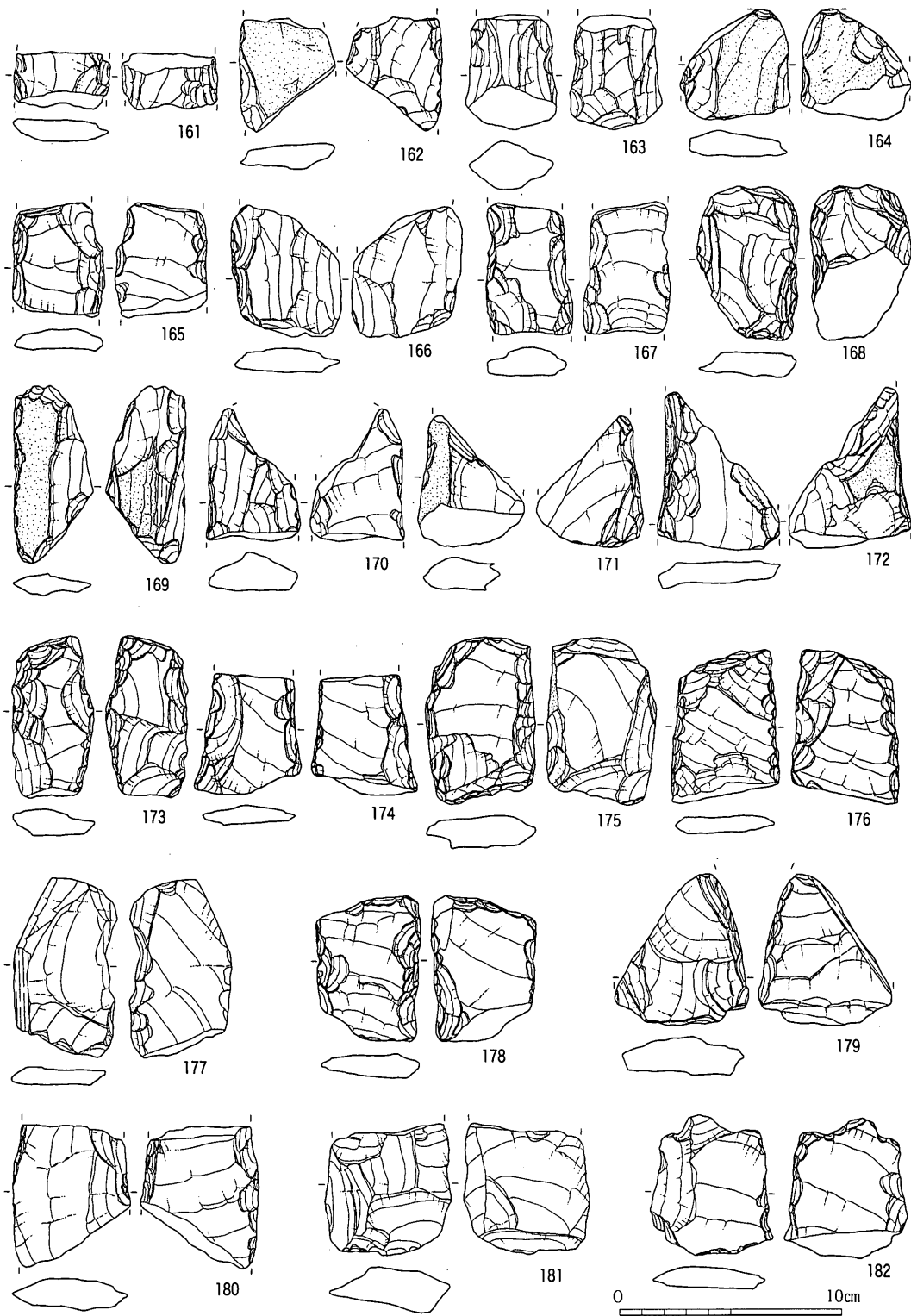


第24图 遺物集中箇処出土石器実測图7 (1:3)

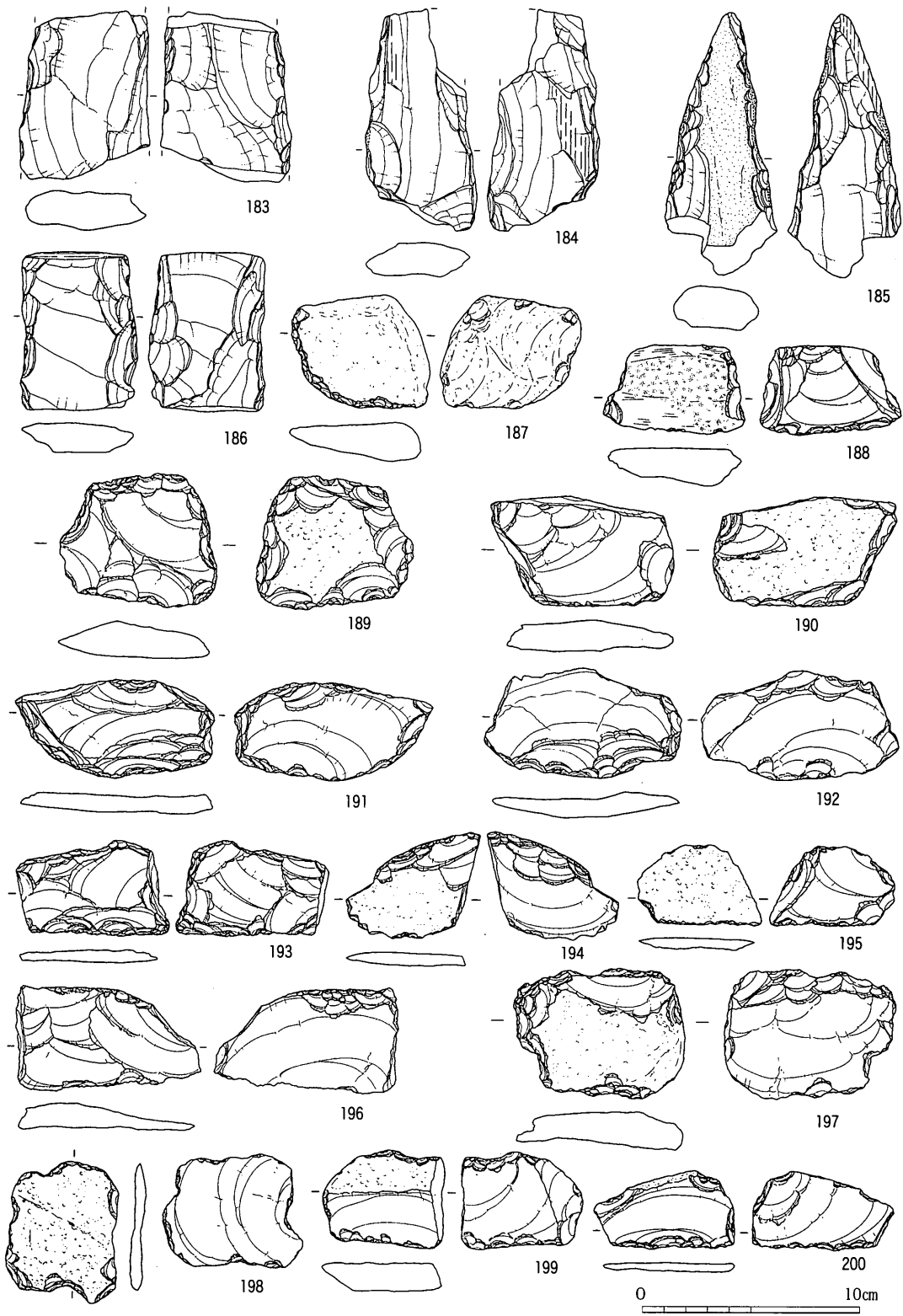


第25图 遺物集中箇処出土石器実測図8 (1:3)

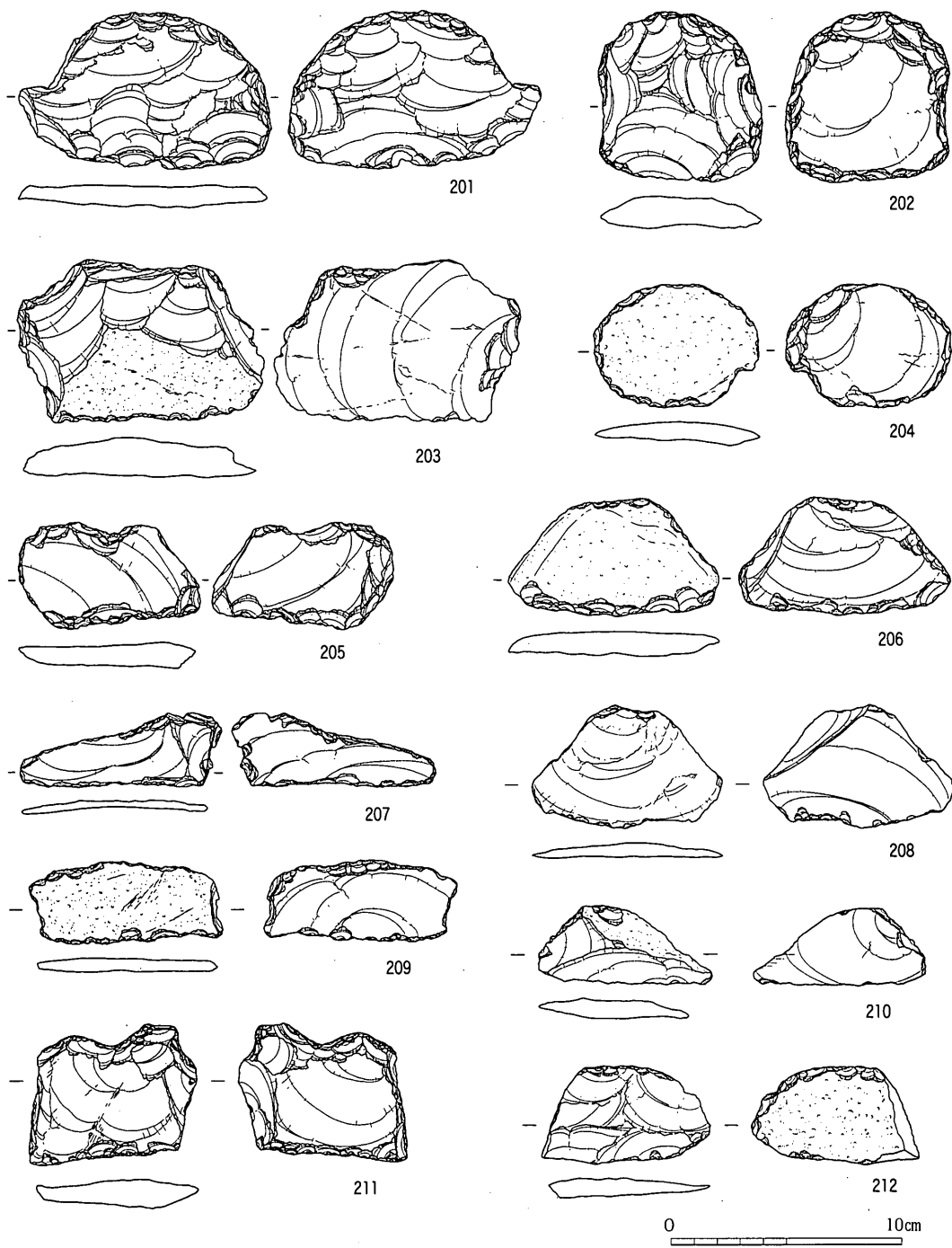




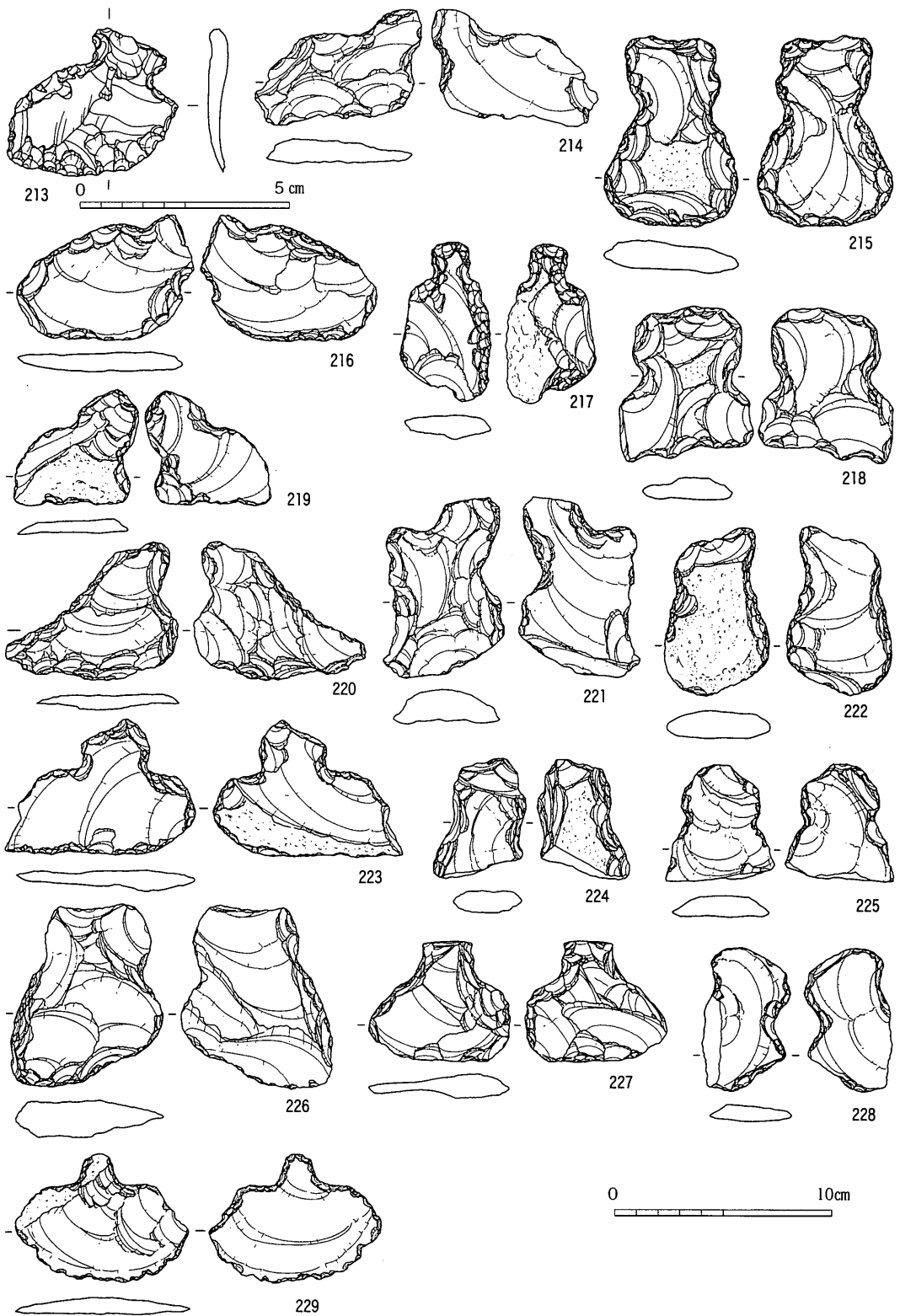
第26图 遺物集中箇処出土石器実測図9 (1:3)



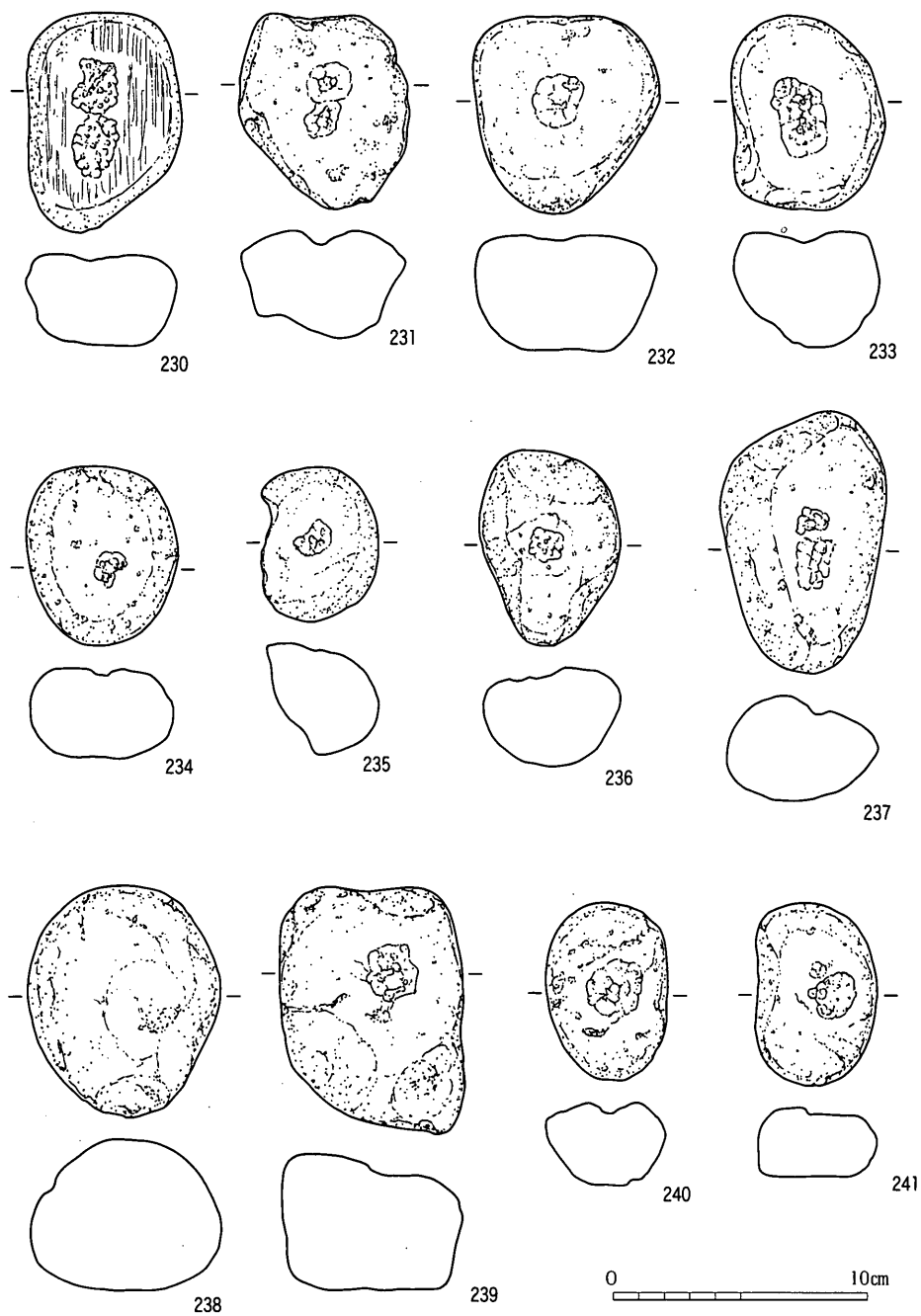
第27图 遺物集中箇処出土石器実測図10 (1:3)



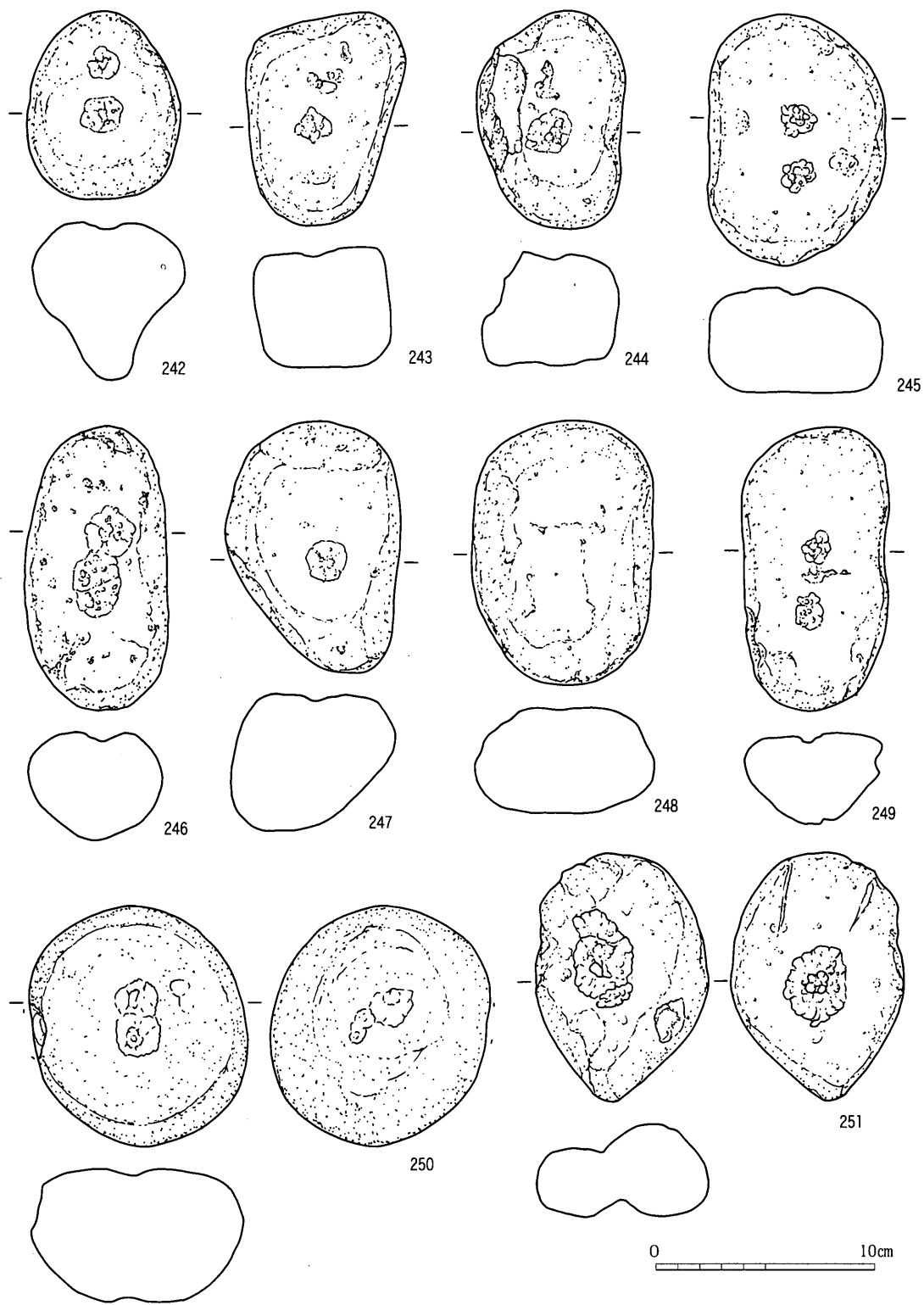
第28图 遺物集中箇処出土石器実測図11 (1:3)



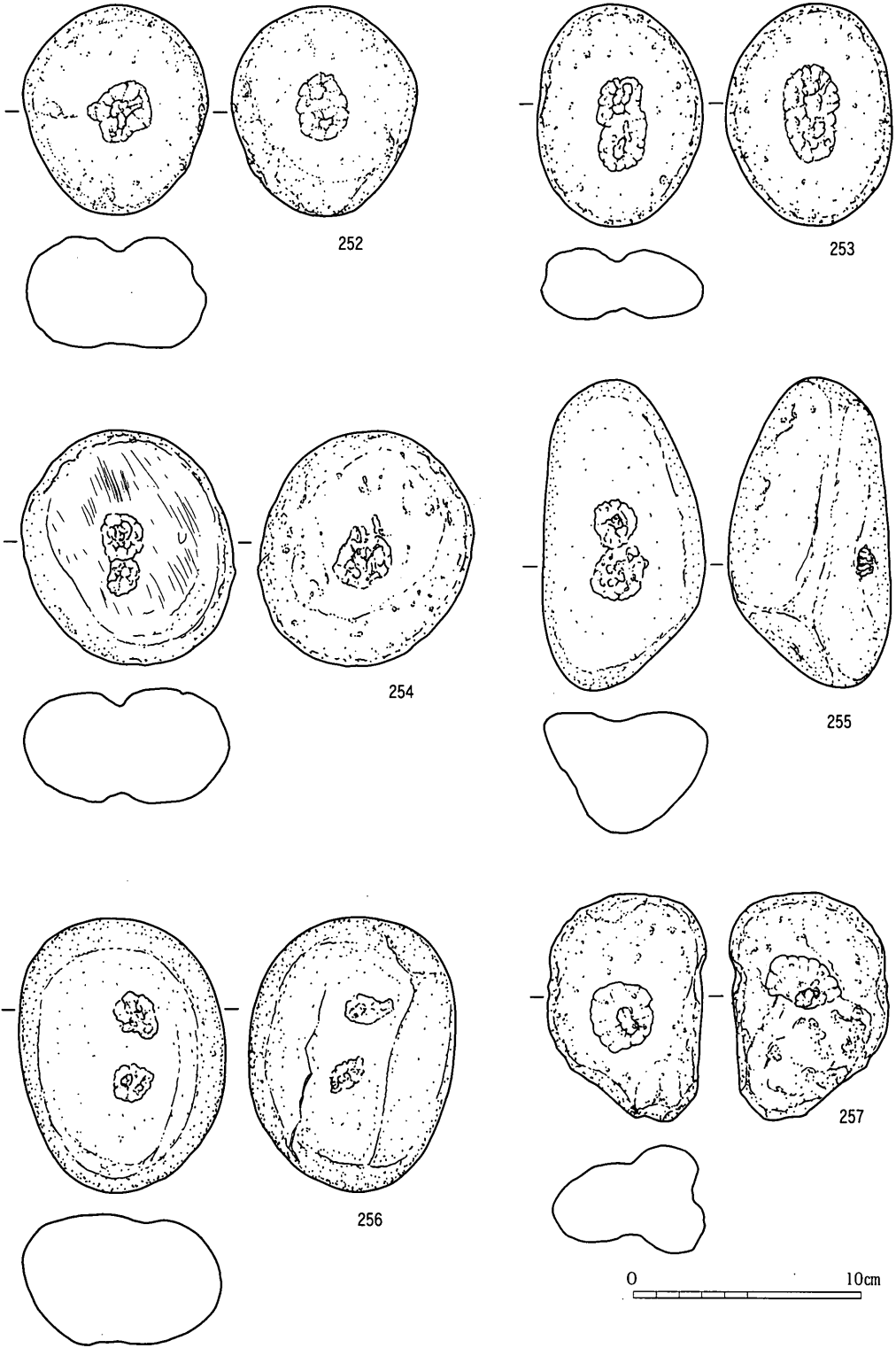
第29图 遺物集中箇処出土石器実測図12 213 (2 : 3) 214~229 (1 : 3)



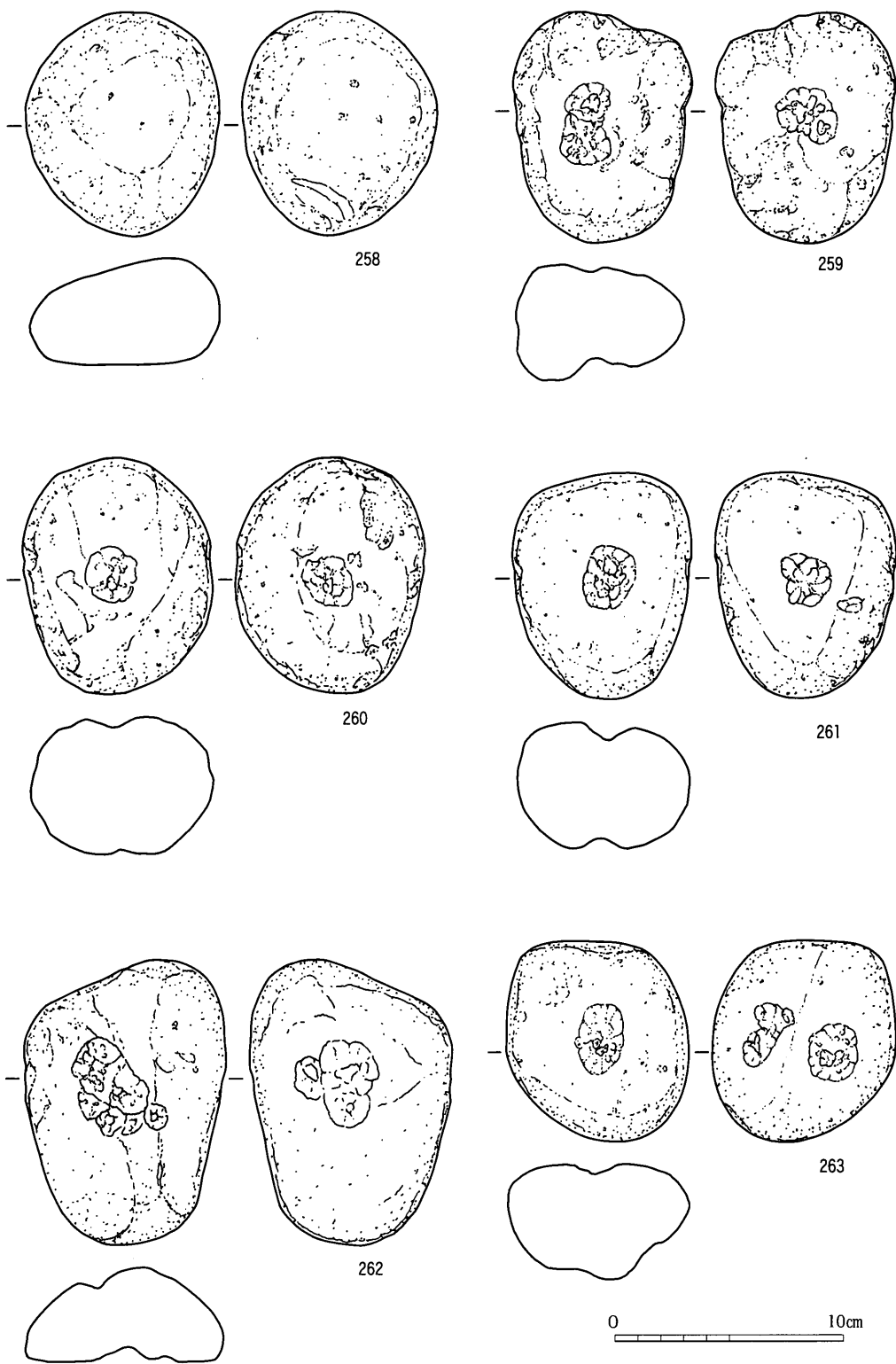
第30图 遺物集中箇処出土石器実測図13 (1 : 3)



第31图 遺物集中箇処出土石器実測図14 (1:3)

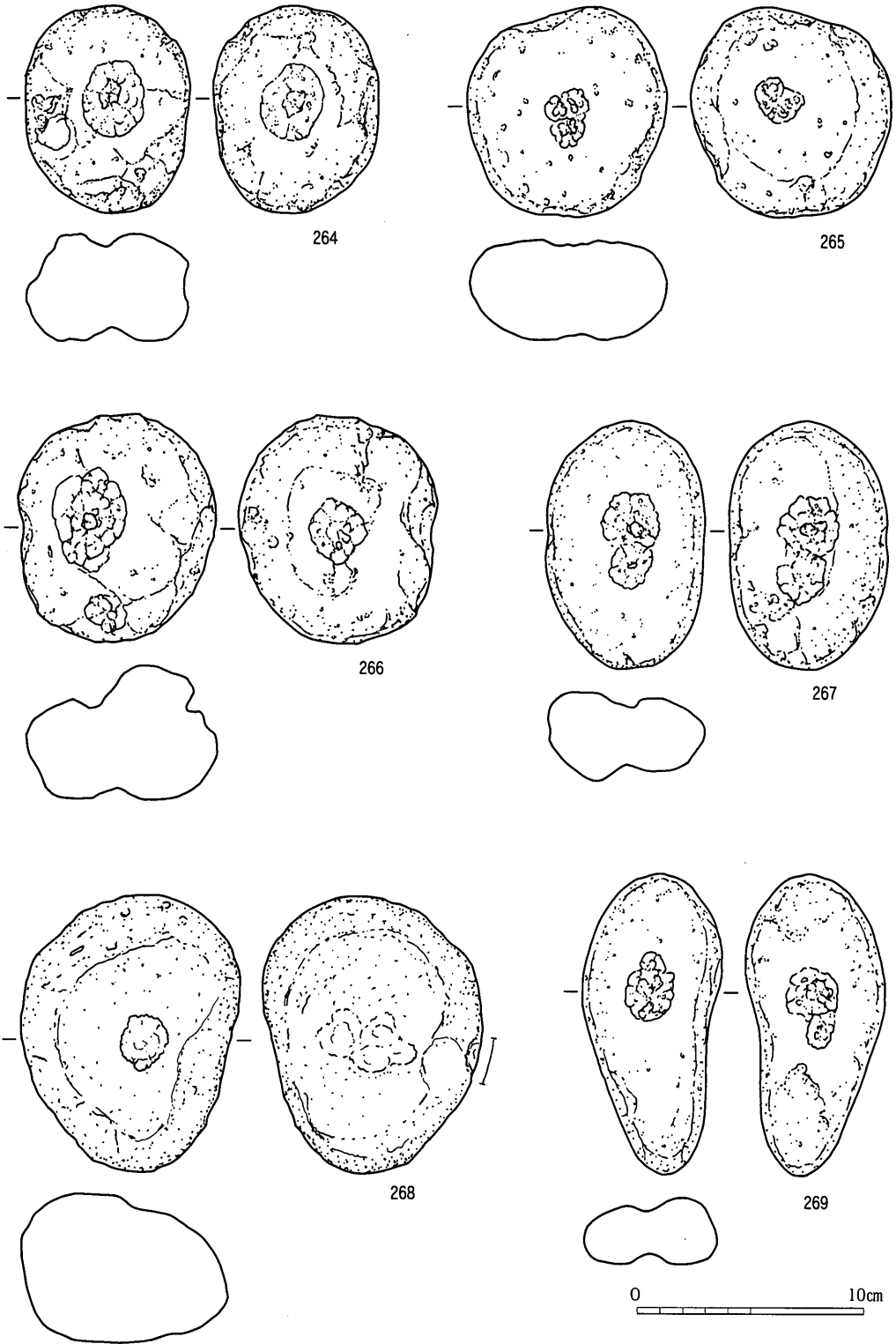


第32图 遺物集中箇処出土石器実測図15 (1 : 3)

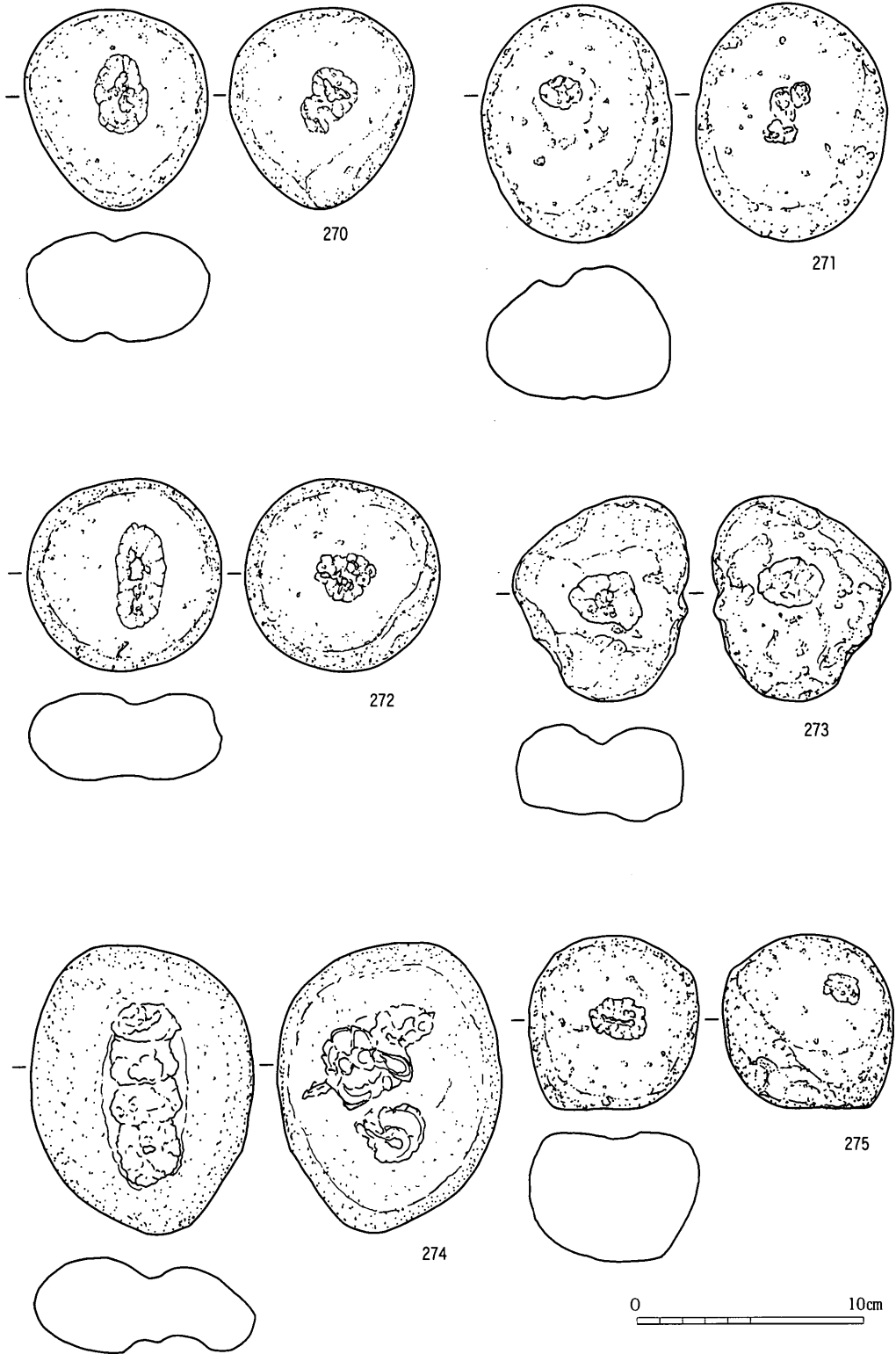


第33图 遺物集中箇処出土石器実測図16 (1 : 3)

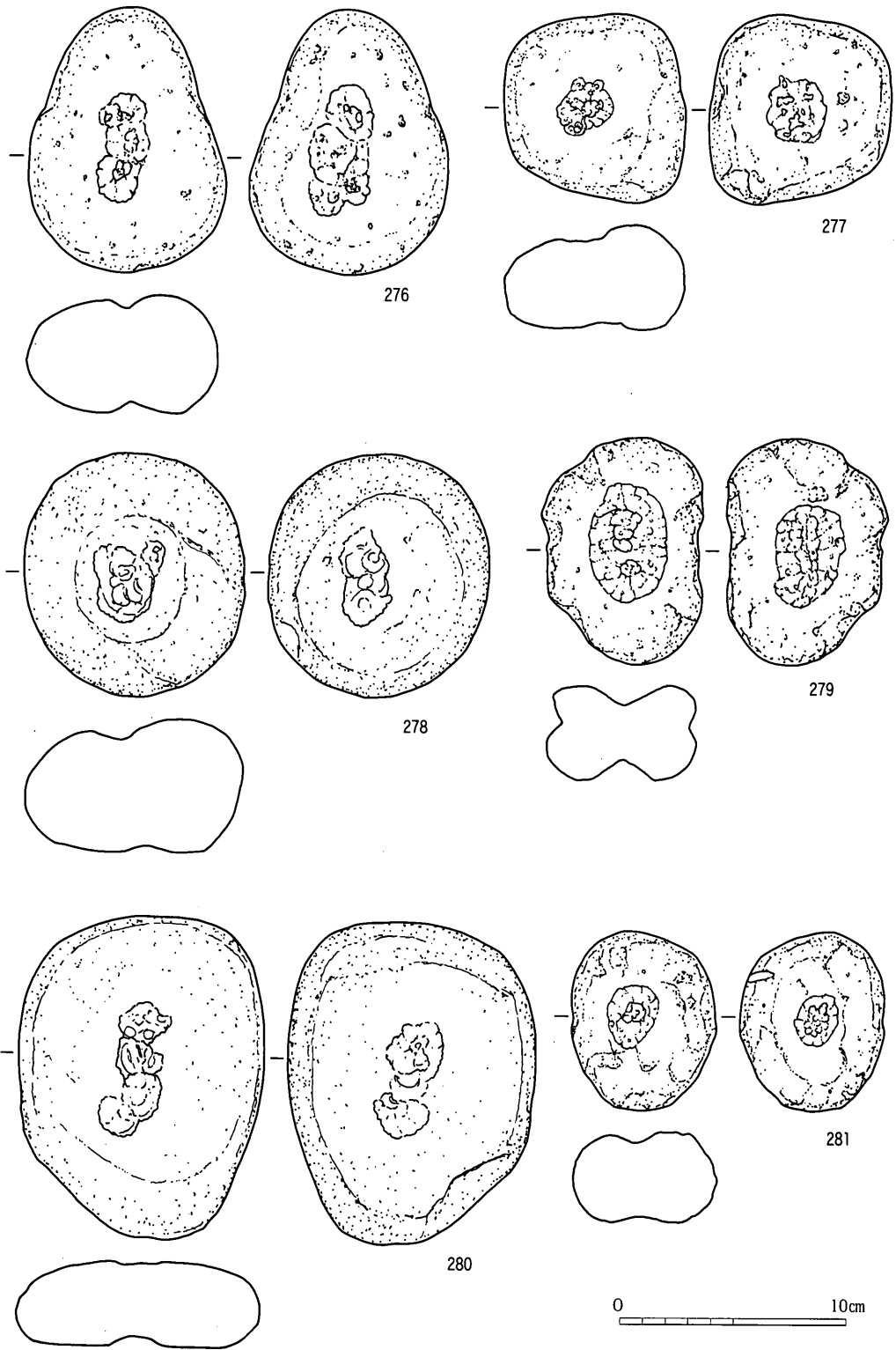




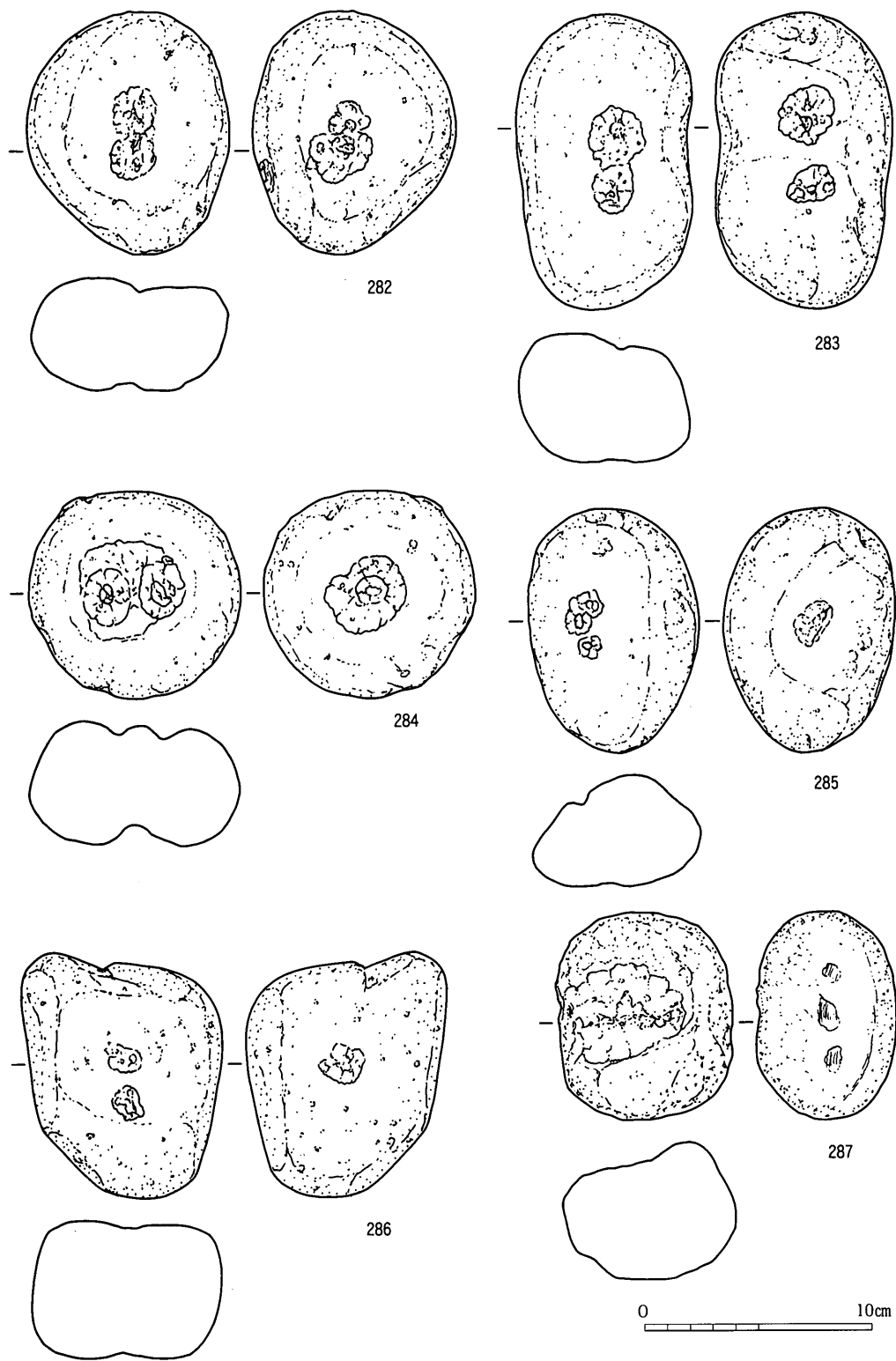
第34图 遺物集中箇処出土石器実測図17 (1 : 3)



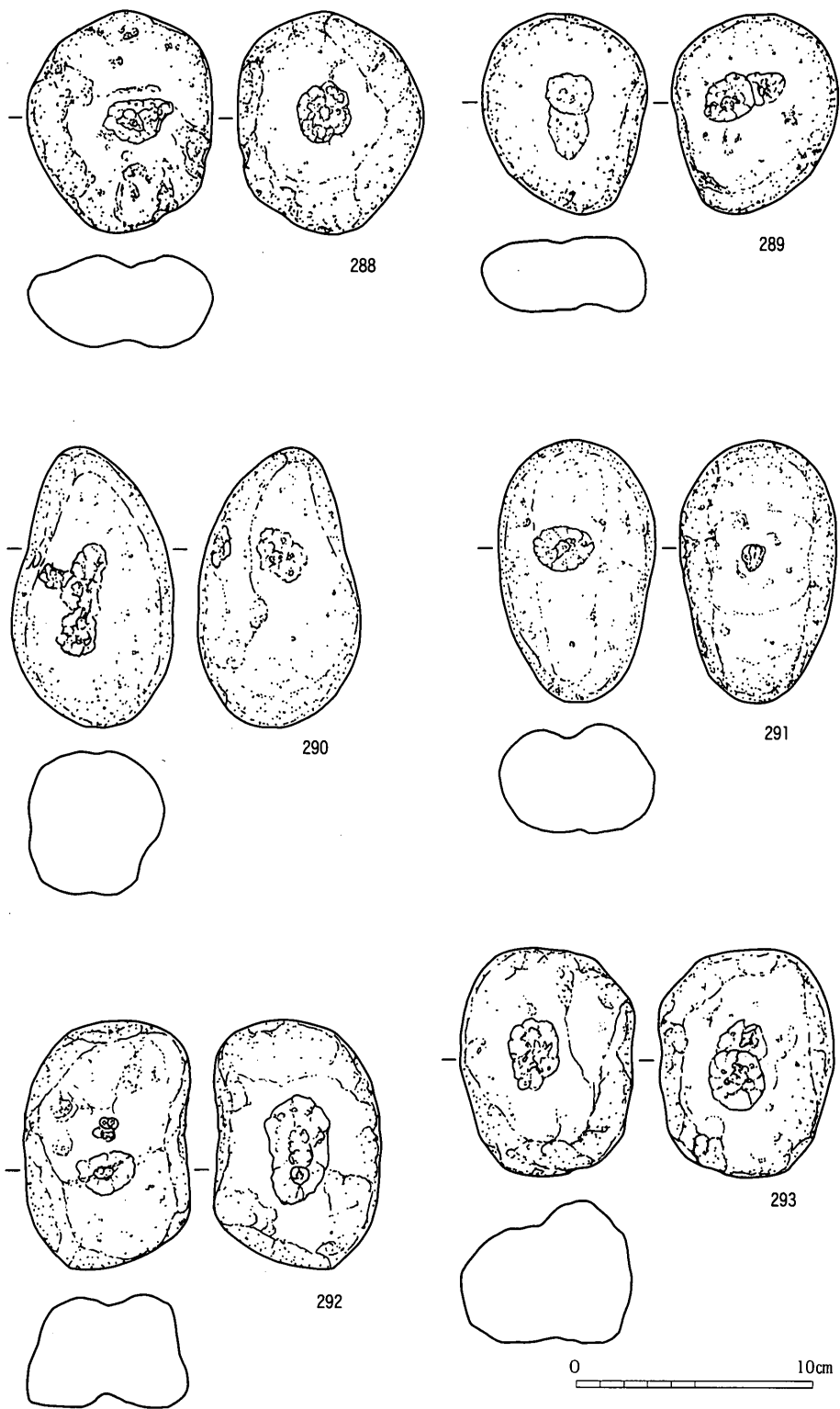
第35图 遺物集中箇処出土石器実測図18 (1 : 3)



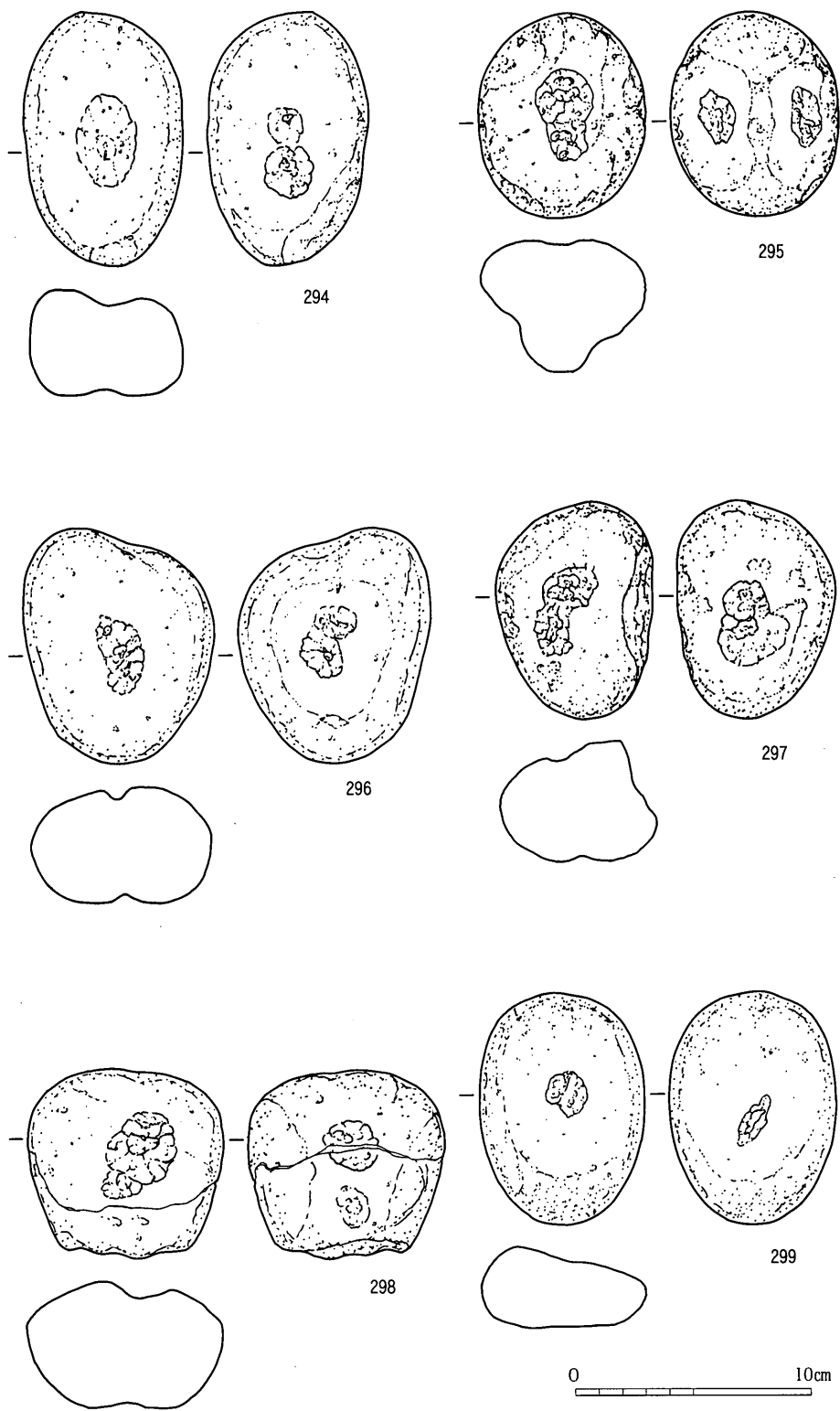
第36图 遺物集中箇処出土石器実測図19 (1 : 3)



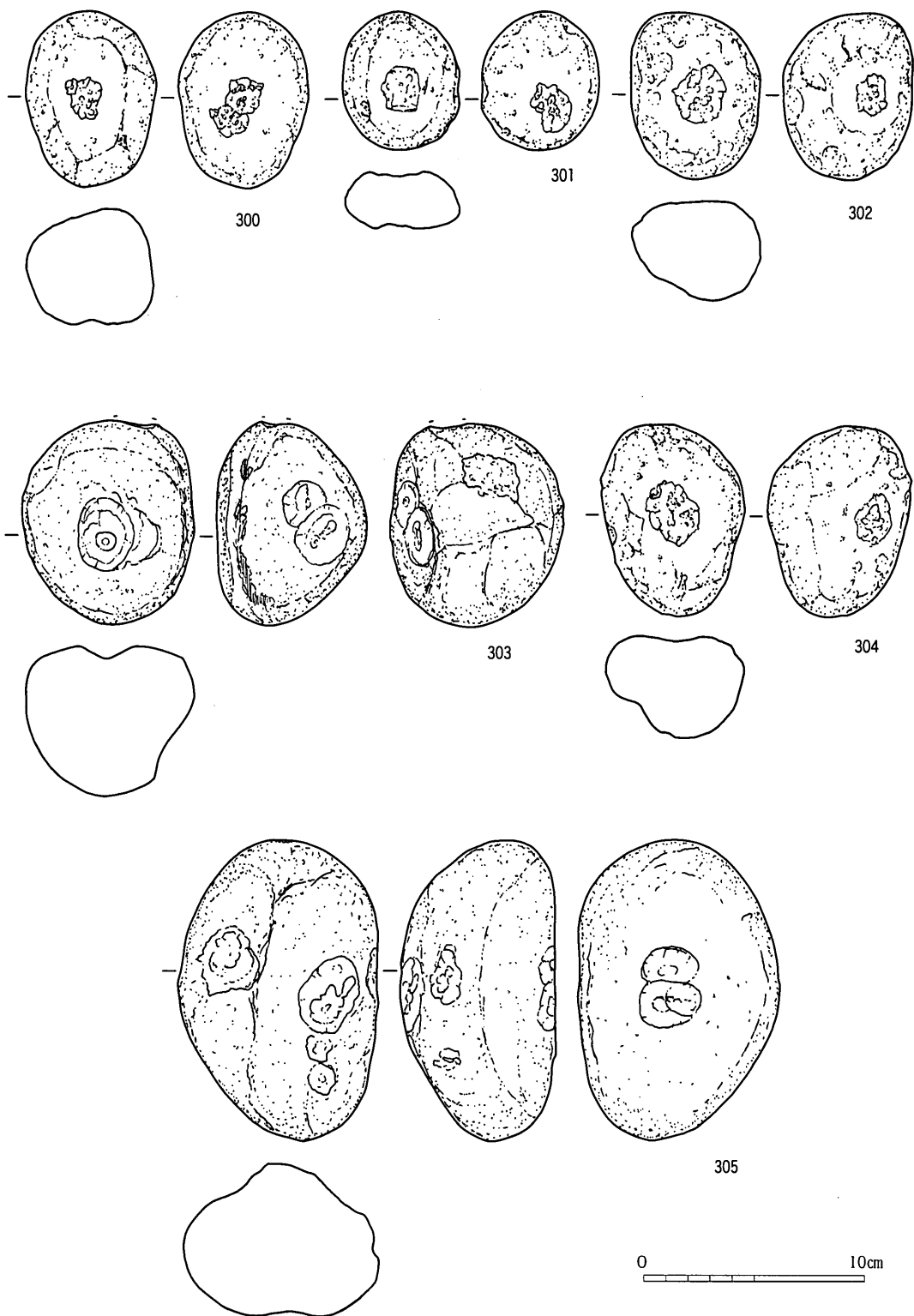
第37図 遺物集中箇処出土石器実測図20 (1 : 3)



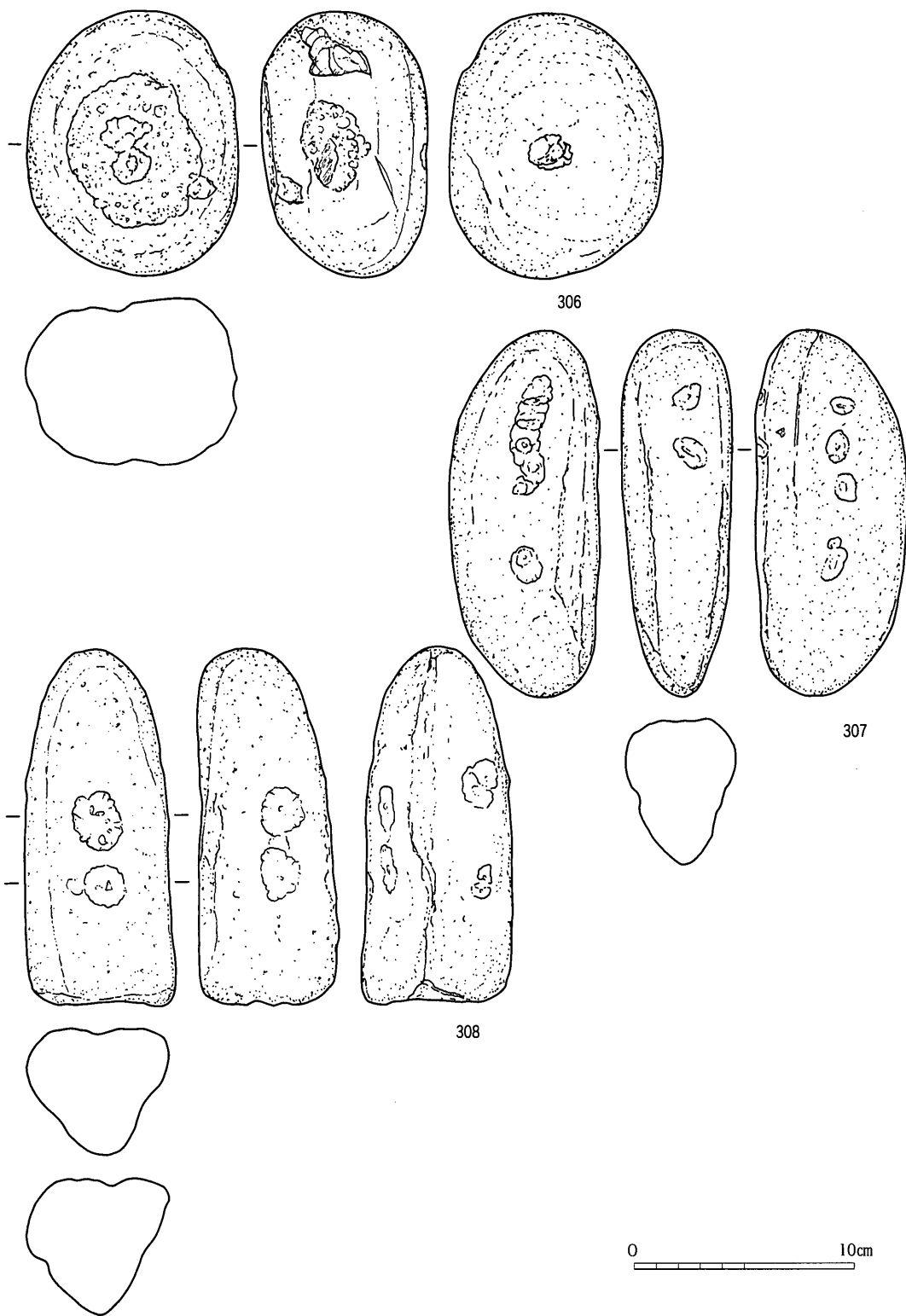
第38图 遺物集中箇処出土石器実測図21 (1 : 3)



第39图 遺物集中箇処出土石器実測図22 (1 : 3)

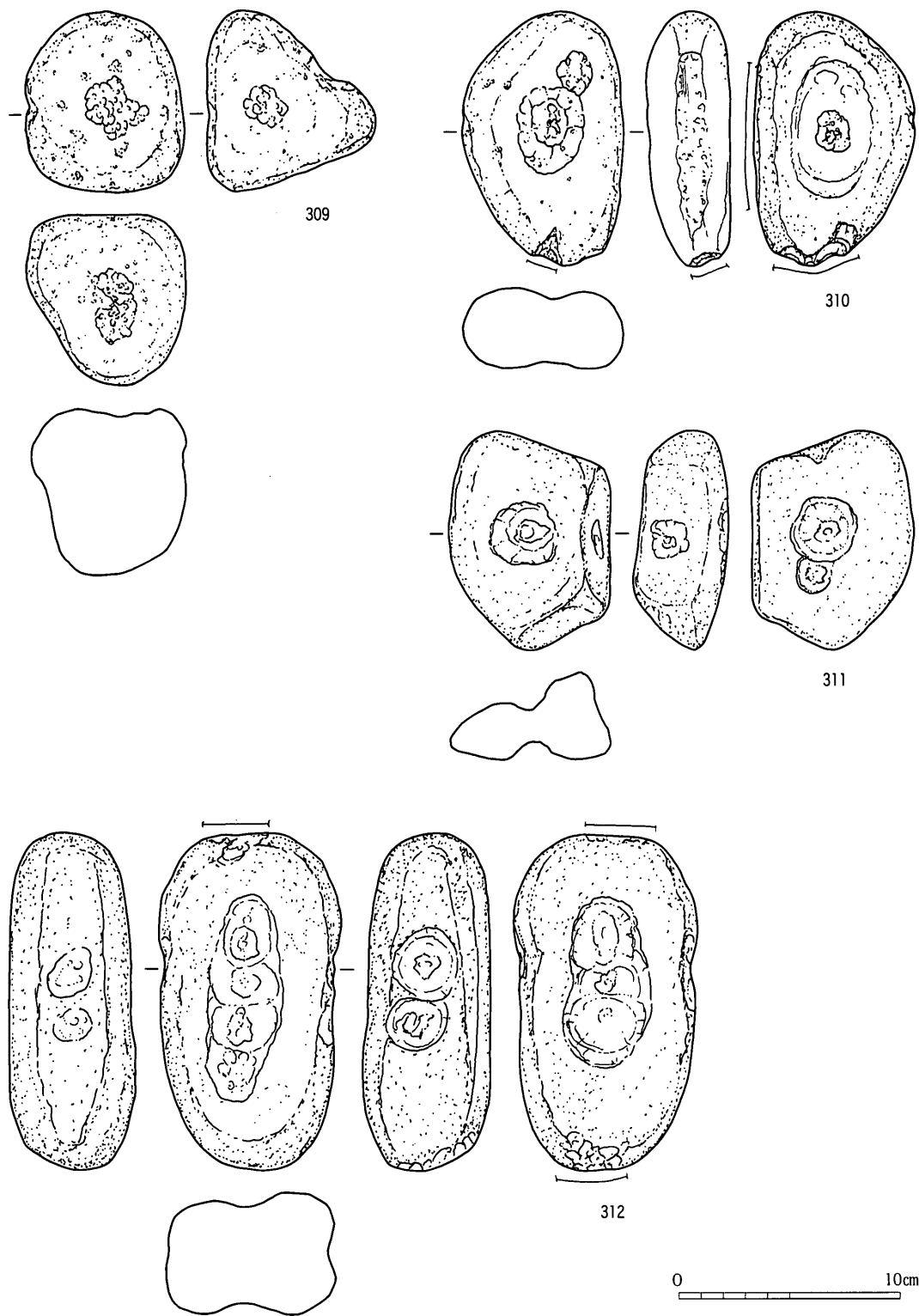


第40图 遺物集中箇処出土石器実測図23 (1 : 3)

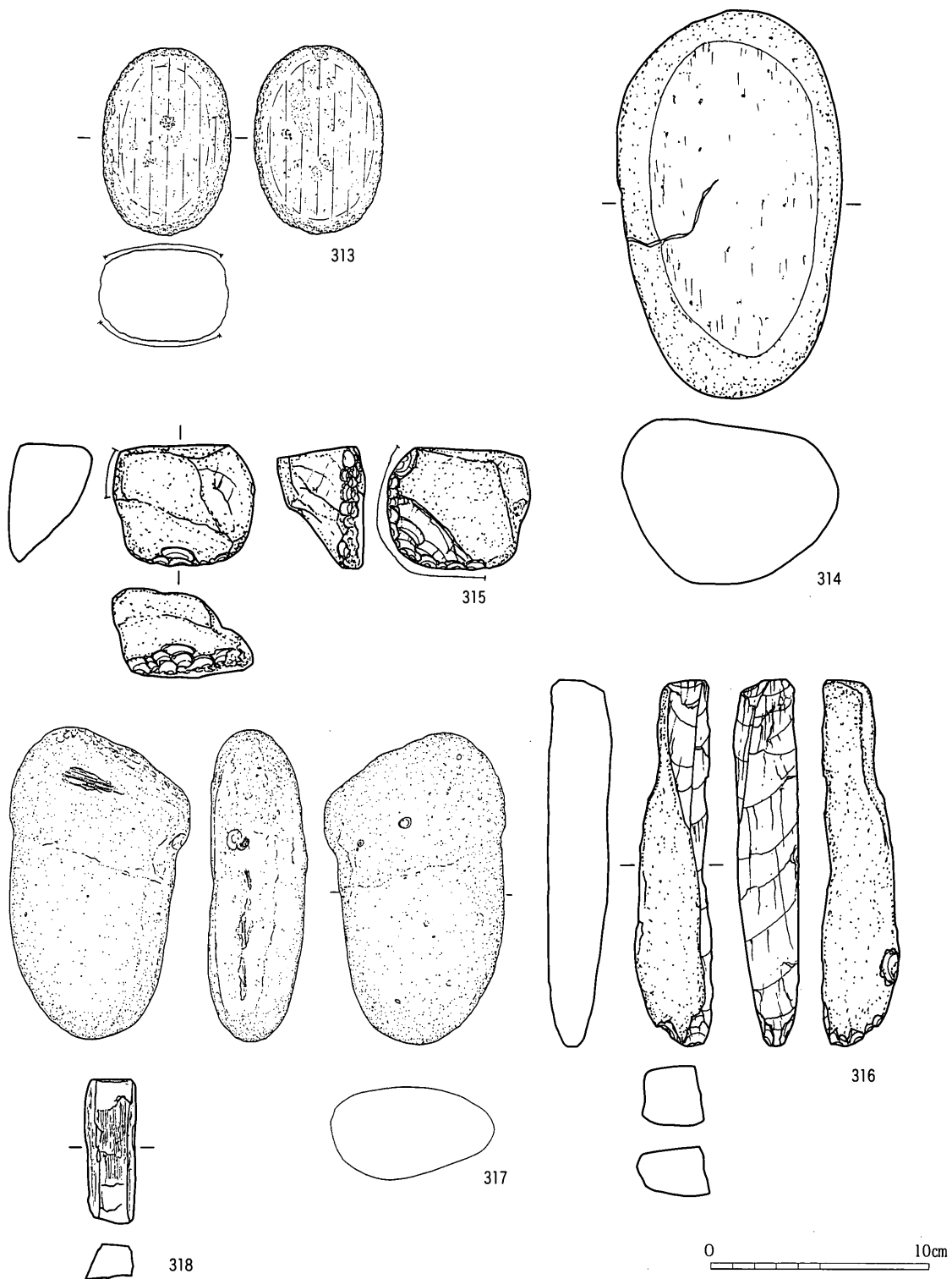


第41图 遺物集中箇処出土石器実測図24 (1:3)





第42图 遗物集中筒处出土石器实测图25 (1 : 3)



第43图 遺物集中箇処出土石器実測図26 (1 : 3)

#### 4) 石製品 (第18・42図)

石製品は飾り玉と有頭石棒がそれぞれ1点ある。

##### 玉製品 (第18図)

玉製品は第18図33の1点で、葉蠟石(滑石)製の垂飾りである。孔から下を欠損し、残存部は少なく全体形は不明である。

##### 有頭石棒 (第42図)

有頭石棒は第42図317の1点で、安山岩の自然石を上手に使い、頭部は自然面をそのまま利用し、基部に敲打整形を施しているが、素材の形を変えるような大きな加工ではなく、頭部と基部が区別できる簡単なものである。

#### (2) 時代不詳の遺物

砥石の破片第42図318が1点出土した。近現代に帰属する可能性は高いが明確な時期を示すことができない。ここでは時代不詳の石器としておきたい。

## V ま と め

発掘調査の対象地が中期集落址(遺跡)の北斜面にあたり、住居址の発見はなく居住域から外れていたが、尾根に直交する浅い沢を埋める黒色土中から土器や石器が出土した。

発見した遺物は廃棄されたものであり、当地方における集落遺跡の北斜面でしばしばみられる同様の施設に比べると、遺物の出土は少ないようである。5次にわたる発掘調査で100軒をこえる住居址を発見していることもあり、やや期待はずれの感はあったが、縄文時代中期の生活の一端に触れることはできたと思っている。

大規模開発に先立つ緊急発掘調査で、土器や石器が集中する施設がしばしば発見されているが、その名称は、諏訪市の千鹿頭社遺跡や荒神山遺跡で「土器集中箇所」、岡谷市の花上寺遺跡で「遺物集中区」、茅野市の北山菖蒲沢A遺跡などで「遺物集中」、梨の木遺跡などではストレートに「廃棄場」と呼び、施設の性格が理解できるものになってきている。

本遺跡に遺物集中箇所が形成された要因は次のことが考えられる。

- ① 破損等により使用不能になった道具の廃棄。
- ② 住居址の重複が著しいことから、竪穴等に埋没していた土器や石器は、その後に竪穴を構築した人たちによって発見されることになるが、発見した土器や石器を竪穴構築者が廃棄。

- ③ 祭祀的要素を含んだ廃棄。
- ④ ①と②が融合した廃棄。
- ⑤ ①と③が融合した廃棄。
- ⑥ ①と②と③が融合した廃棄。

その要因を6大別してみたが、発見した土器に目を向けると完形土器や半完形土器はなく、全て破片で接合も無いに等しく、使用→破損→廃棄の過程が容易に理解できるものばかりで①に該当するようである。

石器は筆者の観察で使用可能なものが多く、使用→破損→廃棄というような単純なものではなく、②ないしは③の要因が加わっているようである。しかし、使用→廃棄の過程をたどったことには変わりはなく、発見数の多い石器ほど使用→廃棄のサイクルが早かったことになる。定形石器は9種307点出土したが、多いものからあげると打製石斧147点、凹石84点、横刃形石器26点、石鏃21点、石匙17点（2点は小形で15点が粗製石匙）、磨製石斧6点、石錐・磨石・叩き石がそれぞれ2点である。石皿のない点はたまたまなのか、それとも廃棄してはいけなかったのか考えさせられる。

最も多い打製石斧の破損率が高い点には注意が必要であろう。言い換えるならば、前尾根遺跡で生活を営んだ人たちは、打製石斧を使う生産活動を行い破損が頻繁に生じたため廃棄したことになる。打製石斧の破損品について小田静夫氏は「縄文中期の打製石斧 東京・貫井南遺跡」で短冊形打製石斧を18分類し分析しているが、本報告は4分類と大枠であるし、刃部をみても直刃、斜刃、円弧刃などがあり、用途の異なる打製石斧を一括して扱った点など残した課題の方が多い。

祭祀石器である有頭石棒の完形品、装身具である飾り玉の破損品がそれぞれ1点と少ないが出土し、いわゆる特殊石器もその目的を達成した後は廃棄されたようである。本施設からの発見はその要因が前述した何れであれ、あくまでも捨てられたもので、石棒の性格を有していたのか、それとも単なる石であるのか考えさせられるものがある。

発掘作業をはじめ整理作業の折々に感じたことを記したが、多くの問題点を残しただけで、まとめることはできなかった。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった方々に厚くお礼申し上げる次第である。

表2 石器計測表

( ) は破損数値

## 石鏃

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石 材	備 考
18-1	(17.0)	14.0	4.5		黒曜石	先端・脚欠
2	(19.0)	15.5	5.0		黒曜石	先端欠
3	21.0	13.0	4.0		黒曜石	脚欠
4	21.0	15.0	4.0		黒曜石	
5	19.0	16.5	3.0		黒曜石	
6	18.0	16.0	4.0		黒曜石	
7	22.0	14.0	3.0		黒曜石	
8	18.0	12.0	3.0		黒曜石	
9	(17.0)	13.0	3.0		黒曜石	先端欠
10	(20.0)	13.0	4.0		黒曜石	先端・脚欠
11	18.0	(13.0)	3.0		黒曜石	脚欠
12	(20.0)	(14.5)	4.0		黒曜石	先端・脚欠
13	21.0	(12.0)	2.0		黒曜石	脚欠
14	22.0	(13.0)	3.5		黒曜石	脚欠
15	18.0	(12.0)	2.0		黒曜石	脚欠
16	(26.0)	(15.0)	4.0		黒曜石	先端・脚欠
17	19.0	(15.5)	3.0		チャート	脚欠
18	(23.0)	(15.0)	3.0		黒曜石	先端・脚欠
19	16.0	(12.0)	2.0		黒曜石	脚欠
20	31.0	(12.0)	5.0		黒曜石	脚欠
21	25.0	(17.0)	5.5		黒曜石	脚欠

## スクレイパー

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石 材	備 考
18-22	19.0	33.0	3.0		黒曜石	
23	21.0	37.0	4.0		黒曜石	
24	32.0	16.0	5.0		黒曜石	
25	22.0	21.0	9.0		黒曜石	
26	29.0	22.0	9.0		黒曜石	
27	21.0	23.5	3.5		黒曜石	折れか
28	18.0	38.0	5.0		黒曜石	錐にも使用か
29	19.0	24.5	5.5		黒曜石	
30	83.0	23.0	5.0	10	頁岩	ナイフ

## 石錐

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石 材	備 考
18-31	52.0	12.0	6.5		黒曜石	
32	16.5	8.0	4.0		黒曜石	基部欠

## 玉製品

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石 材	備 考
18-33	25.0	19.0	11.0		葉蠟石 (滑石)	破損、垂飾り

## 磨製石斧

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石 材	備 考
18-34	(36.0)	(16.0)	(7.0)		頁岩	
19-35	(82.0)	44.0	24.0	(140)	砂岩	
36	(52.0)	43.0	30.0	(80)	硬砂岩	
37	(60.0)	(42.0)	(8.0)	(30)	輝緑凝灰岩	
38	(59.0)	(26.0)	(4.0)	(10.0)	輝緑凝灰岩	
39	(78.0)	(27.0)	(18.0)	(60)	輝緑凝灰岩	再加工

## 打製石斧

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石 材	備 考
19-40	96.0	51.0	15.0	95	硬砂岩	
41	82.0	45.0	11.0	50	硬砂岩	
42	(90.0)	42.0	14.0	(60)	フォルンフェルス	
43	82.0	42.0	20.0	95	硬砂岩	
44	96.0	51.0	17.0	90	粘版岩	

45	96.0	44.0	16.0	80	結晶片岩	
46	96.0	43.0	10.0	65	結晶片岩	
47	98.0	44.0	7.0	70	頁岩	
48	93.0	51.0	14.0	90	フォルンフェルス	
49	113.0	51.0	20.0	140	結晶片岩	
50	94.0	46.0	14.0	110	緑色岩	
51	79.0	40.0	8.0	40	砂岩	
52	81.0	51.0	12.0	80	硬砂岩	
53	73.0	46.0	16.0	70	スレート	
54	128.0	50.0	15.0	135	輝緑凝灰岩	
55	98.0	27.0	17.0	75	硬砂岩	
20-56	111.0	55.0	20.0	180	硬砂岩	
57	107.0	24.0	48.0	95	結晶片岩	
58	104.0	49.0	22.0	165	結晶片岩	
59	109.0	42.0	10.0	65	結晶片岩	
60	110.0	56.0	14.0	135	硬砂岩	
61	121.0	50.0	17.0	165	硬砂岩	
62	122.0	42.0	15.0	115	硬砂岩	
63	95.0	34.0	9.0	35	硬砂岩	
64	142.0	51.0	21.0	190	結晶片岩	
65	133.0	64.0	17.0	225	硬砂岩	
66	112.0	58.0	11.0	125	結晶片岩	
67	128.0	48.0	20.0	180	硬砂岩	
68	111.0	54.0	19.0	120	硬砂岩	
69	96.0	45.0	8.0	45	千枚岩	
70	76.0	40.0	13.0	40	硬砂岩	
21-71	105.0	53.0	15.0	120	結晶片岩	
72	91.0	57.0	13.0	90	硬砂岩	
73	89.0	65.0	27.0	155	フォルンフェルス	
74	68.0	44.0	6.0	25	スレート	
75	86.0	48.0	18.0	75	砂岩	
76	103.0	51.0	19.0	120	硬砂岩	
77	88.0	38.0	14.0	70	硬砂岩	
78	59.0	33.0	11.0	25	粘版岩	
79	94.0	49.0	15.0	95	千枚岩	
80	97.0	61.0	17.0	90	硬砂岩	
81	125.0	55.0	13.0	130	結晶片岩	
82	86.0	35.0	7.0	30	結晶片岩	
83	107.0	35.0	9.0	55	フォルンフェルス	
84	77.0	32.0	6.0	20	結晶片岩	
85	88.0	40.0	10.0	55	スレート	
86	83.0	28.0	11.0	25	結晶片岩	
87	70.0	60.0	14.0	85	硬砂岩	
22-88	(45.0)	(36.0)	(8.0)	(20)	輝緑凝灰岩	
89	(53.0)	(49.0)	(11.0)	(40)	頁岩	
90	(62.0)	(45.0)	(14.0)	(70)	頁岩	
91	(79.0)	(43.0)	(15.0)	(75)	硬砂岩	
92	(40.0)	(58.0)	(12.0)	(40)	粘板岩	
93	(35.0)	(55.0)	(13.0)	(30)	硬砂岩	
94	(41.0)	(56.0)	(15.0)	(40)	フォルンフェルス	
95	(48.0)	(51.0)	(10.0)	(35)	結晶片岩	
96	(101.0)	(56.0)	(17.0)	(115)	結晶片岩	
97	(73.0)	(48.0)	(7.0)	(35)	輝緑凝灰岩	
98	(65.0)	(52.0)	(10.0)	(50)	結晶片岩	
99	(95.0)	(56.0)	(24.0)	(155)	硬砂岩	
100	(116.0)	(54.0)	(19.0)	(165)	硬砂岩	
101	(108.0)	(61.0)	(13.0)	(120)	変成岩	
102	(69.0)	(49.0)	(19.0)	(90)	硬砂岩	

103	(91.0)	(43.0)	(14.0)	(75)	輝緑凝灰岩	
104	(93.0)	(50.0)	(17.0)	(95)	フォルンフェルス	
105	(83.0)	(45.0)	(20.0)	(90)	フォルンフェルス	
106	(73.0)	(44.0)	(10.0)	(50)	スレート	
23-107	(61.0)	(59.0)	(13.0)	(65)	砂岩	
108	(59.0)	(60.0)	(21.0)	(90)	硬砂岩	
109	(71.0)	(60.0)	(16.0)	(100)	硬砂岩	
110	(102.0)	(52.0)	(19.0)	(120)	フォルンフェルス	
111	(68.0)	(58.0)	(13.0)	(80)	結晶片岩	
112	(70.0)	(75.0)	(17.0)	(115)	輝岩	
113	(61.0)	(53.0)	(18.0)	(70)	硬砂岩	
114	(84.0)	(59.0)	(21.0)	(120)	硬砂岩	
115	(67.0)	(60.0)	(19.0)	(100)	フォルンフェルス	
116	(87.0)	(19.0)	(12.0)	(60)	フォルンフェルス	
117	(81.0)	(65.0)	(14.0)	(120)	硬砂岩	
118	(102.0)	(52.0)	(11.0)	(90)	フォルンフェルス	
119	(92.0)	(54.0)	(17.0)	(100)	硬砂岩	
120	(104.0)	(44.0)	(16.0)	(100)	硬砂岩	
121	(69.0)	(48.0)	(16.0)	(75)	硬砂岩	
24-122	(110.0)	(53.0)	(23.0)	(165)	フォルンフェルス	
123	(100.0)	(52.0)	(12.0)	(85)	結晶片岩	
124	(99.0)	(54.0)	(18.0)	(135)	砂岩	
125	(104.0)	(49.0)	(18.0)	(115)	砂岩	
126	(68.0)	(43.0)	(25.0)	(90)	硬砂岩	
127	(95.0)	(45.0)	(18.0)	(80)	硬砂岩	
128	(88.0)	(46.0)	(12.0)	(50)	輝緑凝灰岩	磨痕
129	(124.0)	(48.0)	(19.0)	(155)	フォルンフェルス	
130	(97.0)	(46.0)	(16.0)	(95)	砂岩	
131	(112.0)	(43.0)	(17.0)	(130)	結晶片岩	
132	(98.0)	(42.0)	(9.0)	(45)	千枚岩	
133	(103.0)	(48.0)	(20.0)	(140)	変成岩	
134	(78.0)	(41.0)	(13.0)	(45)	結晶片岩	
135	(82.0)	(44.0)	(12.0)	(50)	スレート	
136	(106.0)	(48.0)	(19.0)	(105)	フォルンフェルス	
137	(71.0)	(39.0)	(9.0)	(40)	フォルンフェルス	
138	(76.0)	(38.0)	(19.0)	(60)	砂岩	
139	(80.0)	(40.0)	(15.0)	(65)	結晶片岩	
25-140	(46.0)	(38.0)	(13.0)	(30)	スレート	
141	(56.0)	(43.0)	(16.0)	(50)	砂岩	
142	(69.0)	(53.0)	(9.0)	(55)	砂岩	
143	(79.0)	(51.0)	(12.0)	(75)	結晶片岩	
144	(78.0)	(46.0)	(7.0)	(30)	スレート	
145	(48.0)	(48.0)	(11.0)	(40)	結晶片岩	
146	(42.0)	(36.0)	(12.0)	(30)	フォルンフェルス	
147	(84.0)	(57.0)	(23.0)	(130)	硬砂岩	
148	(68.0)	(55.0)	(20.0)	(85)	フォルンフェルス	
149	(71.0)	(56.0)	(10.0)	(75)	砂岩	
150	(61.0)	(53.0)	(12.0)	(45)	フォルンフェルス	
151	(55.0)	(48.0)	(9.0)	(40)	粘板岩	
152	(67.0)	(24.0)	(11.0)	(20)	結晶片岩	
153	(101.0)	(60.0)	(19.0)	(145)	砂岩	
154	(69.0)	(51.0)	(14.0)	(60)	結晶片岩	
155	(82.0)	(45.0)	(26.0)	(120)	砂岩	
156	(79.0)	(41.0)	(17.0)	(70)	輝緑凝灰岩	
157	(71.0)	(46.0)	(15.0)	(65)	砂岩	
158	(89.0)	(56.0)	(23.0)	(135)	砂岩	
159	(80.0)	(48.0)	(20.0)	(115)	フォルンフェルス	
160	(75.0)	(56.0)	(22.0)	(75)	砂岩	

26-161	(21.0)	(44.0)	(10.0)	(20)	フォルンフェルス	
162	(52.0)	(44.0)	(11.0)	(30)	フォルンフェルス	
163	(53.0)	(42.0)	(22.0)	(55)	硬砂岩	
164	(50.0)	(51.0)	(11.0)	(40)	硬砂岩	
165	(53.0)	(42.0)	(9.0)	(35)	硬砂岩	
166	(61.0)	(51.0)	(11.0)	(36)	スレート	
167	(61.0)	(40.0)	(13.0)	(55)	砂岩	
168	(72.0)	(46.0)	(12.0)	(50)	結晶片岩	
169	(81.0)	(37.0)	(10.0)	(35)	結晶片岩	
170	(61.0)	(43.0)	(18.0)	(45)	フォルンフェルス	
171	(60.0)	(50.0)	(15.0)	(40)	硬砂岩	
172	(73.0)	(56.0)	(12.0)	(50)	砂岩	
173	(75.0)	(38.0)	(12.0)	(40)	硬砂岩	
174	(55.0)	(49.0)	(9.0)	(30)	硬砂岩	
175	(77.0)	(51.0)	(15.0)	(80)	硬砂岩	
176	(71.0)	(50.0)	(8.0)	(45)	スレート	
177	(82.0)	(43.0)	(8.0)	(55)	スレート	
178	(67.0)	(48.0)	(11.0)	(50)	砂岩	
179	(69.0)	(61.0)	(18.0)	(85)	硬砂岩	
180	(66.0)	(54.0)	(15.0)	(65)	硬砂岩	
181	(60.0)	(58.0)	(21.0)	(70)	硬砂岩	
182	(65.0)	(57.0)	(9.0)	(45)	硬砂岩	
27-183	(78.0)	(62.0)	(18.0)	(125)	フォルンフェルス	
184	(103.0)	(53.0)	(16.0)	(125)	変成岩	
185	(123.0)	(53.0)	(18.0)	(130)	硬砂岩	
186	(74.0)	(55.0)	(15.0)	(90)	フォルンフェルス	

横刃形石器

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石 材	備 考
27-187	52.0	60.0	18.0	70	安山岩	くさび
188	41.0	66.0	18.0	50	砂岩	くさび
189	51.0	71.0	17.0	85	硬砂岩	くさび
190	52.0	82.0	15.0	105	硬砂岩	くさび
191	45.0	92.0	7.0	50	結晶片岩	
192	51.0	92.0	10.0	50	結晶片岩	
193	45.0	65.0	6.0	30	スレート	
194	43.0	55.0	6.0	30	頁岩	
195	37.0	51.0	5.0	15	硬砂岩	
196	48.0	85.0	11.0	60	硬砂岩	
197	60.0	78.0	17.0	110	硬砂岩	
198	57.0	58.0	5.0	25	フォルンフェルス	
199	44.0	56.0	13.0	40	硬砂岩	
200	37.0	60.0	4.0	15	砂岩	
28-201	69.0	111.0	9.0	105	スレート	
202	74.0	71.0	14.0	90	フォルンフェルス	
203	69.0	102.0	16.0	150	硬砂岩	
204	53.0	72.0	8.0	55	硬砂岩	
205	48.0	78.0	11.0	50	結晶片岩	
206	51.0	93.0	10.0	70	砂岩	
207	32.0	91.0	4.0	15	頁岩	
208	54.0	84.0	6.0	40	フォルンフェルス	
209	35.0	82.0	5.0	30	硬砂岩	
210	34.0	76.0	8.0	20	硬砂岩	
211	57.0	70.0	13.0	75	頁岩	
212	43.0	71.0	8.0	35	硬砂岩	

石匙

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石 材	備 考
29-213	34.0	41.0	5.0		チャート	
214	46.0	75.0	11.0	50	緑色片岩	



215	88.0	63.0	13.0	90	硬砂岩	
216	85.0	53.0	8.0	60	硬砂岩	
217	73.0	42.0	11.0	35	チャート	
218	67.0	63.0	10.0	55	結晶片岩	刃部再加工
219	54.0	53.0	6.0	25.0	砂岩	
220	60.0	81.0	7.0	40	スレート	
221	77.0	51.0	14.0	85	硬砂岩	刃部再加工
222	73.0	49.0	13.0	60	硬砂岩	
223	63.0	83.0	10.0	55	緑色片岩	
224	48.0	50.0	10.0	30	スレート	
225	54.0	50.0	10.0	35	砂岩	
226	85.0	70.0	17.0	115	硬砂岩	
227	75.0	67.0	11.0	45	フォルンフェルス	
228	68.0	38.0	8.0	30	砂岩	
229	60.0	82.0	8.0	40	硬砂岩	

凹石

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	凹 穴 数				備 考
					A面	B面	C面	D面	
29-230	103.5	74.5	48.0	480	2				
231	91.5	81.0	53.5	380	2				
232	92.5	88.5	61.5	495	1	1			
233	91.5	72.5	55.0	385	2				
234	85.0	73.0	48.0	315	1				
235	73.5	(55.5)	54.0	(235)	2				破損
236	92.5	67.0	49.0	330	1				
237	124.0	78.5	49.5	510	2				
238	106.0	89.0	69.5	645		1			
239	116.0	88.0	65.0	715	1	1			
240	84.0	57.5	41.0	195	1				
241	86.0	58.0	36.5	215	2				
31-242	87.0	73.5	74.0	455	2				
243	99.0	75.5	59.5	475	2				
244	101.0	70.0	53.5	385	2				
245	116.0	83.0	50.0	630	2	1			
246	132.5	69.0	51.5	535	3	2	2		
247	117.0	83.0	69.0	805	1				
248	123.0	85.0	51.0	545	1				
249	133.0	69.0	45.0	555	2				
250	112.5	103.5	62.5	795	2	2			
251	116.5	80.5	52.5	375	1	1		1	
32-252	93.5	84.0	50.5	450	1	2			
253	99.0	74.0	33.0	295	3	2	1		
254	105.5	97.0	53.0	535	2	1			
255	139.0	72.5	54.0	505	2	1			
256	123.0	93.5	61.0	950	2	2			
257	102.0	71.0	51.0	365	1	1	1	1	
33-258	99.0	88.0	49.0	470	1				
259	102.5	80.0	53.5	490	2	1			
260	105.5	86.0	63.0	565	1	1			
261	101.0	80.0	57.0	515	2	1			
262	128.0	91.5	48.5	580	4	3			
263	90.5	81.5	54.5	435	1	1	2		
34-264	92.5	75.0	50.5	345	1	1	1	1	
265	94.0	90.0	45.5	415	1	1			
266	103.0	90.5	62.5	470	1	1	1	1	
267	112.0	71.5	42.0	350	2	2			
268	124.5	99.5	69.0	895	1				
269	135.5	63.0	31.5	255	1	2			

35-270	89.0	83.5	51.0	385	1	1			
271	105.0	86.0	59.5	590	1				
272	86.5	89.0	41.0	350	1	1			
273	91.5	79.5	51.5	315	1	1			
274	131.0	102.0	48.0	620	4	2			
275	79.5	77.0	59.0	390	1	1			
36-276	118.0	90.0	54.5	510	3	3	1	1	
277	85.0	82.0	47.0	395	1	1			
278	110.0	100.5	61.5	765	1	2			
279	102.0	72.5	44.0	315	1	2	1	1	
280	145.5	112.0	43.0	740	4	3			
281	81.0	65.0	42.5	230	1	1			
37-282	107.5	92.5	51.0	540	2	2		1	
283	131.0	79.5	58.5	700	2	2	1		
284	92.5	80.0	57.0	515	2	1			
285	109.5	77.5	51.5	460	3	1			
286	111.0	91.5	64.5	815	2	1			
287	94.0	80.0	63.0	510	1	3			
38-288	95.0	81.5	42.0	350	1	1			
289	85.5	72.0	36.0	205	2	2			
290	121.0	71.0	64.0	530	5	2	1	1	
291	113.0	68.0	48.0	360	1	1			
292	107.5	73.0	51.5	495	2	2	1	1	
293	98.5	75.5	66.0	495	1	2			
39-294	108.0	70.5	48.0	415	1	2			
295	87.0	72.5	58.0	325	2	1	1		
296	102.0	84.5	52.0	500	3	2			
297	94.0	68.5	52.5	380	2	2			
298	(82.5)	86.5	64.0	(450)	2	2			破損接合
299	101.0	72.0	40.5	240	1	1			
40-300	80.5	61.0	54.5	310	1	2			
301	63.5	55.0	33.0	120	1	1			
302	60.5	60.0	47.0	235	1	1			
303	94.0	81.0	70.5	535	1	2			叩き石
304	88.5	66.5	48.0	310	1	1			
305	139.0	93.5	72.0	835	1	3	2		
41-306	121.0	99.5	78.5	1025	2	2	1		
307	168.5	51.5	70.5	660	2	2	5		
308	165.5	71.0	66.0	845	2	2	2		
42-309	82.5	74.5	79.0	410	1	1	1	1	
310	116.5	74.5	39.0	370	2	1		2	叩き石
311	101.5	75.5	44.0	270	1	2	1		
312	155.5	85.5	59.5	895	4	3	2	2	叩き石

磨石

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石 材	備 考
43-313	86.0	60.5	41.5	325	安山岩	
314	178.5	105.5	79.0	1775	安山岩	自然石か

叩き石

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石 材	備 考
43-315	57.5	67.5	42.0	210	輝緑凝灰岩	
316	171.5	36.5	30.5	275	ミカブ緑色岩	

石棒

番号	長さ mm	幅 mm	厚さ mm	重さ g	石 材	備 考
43-317	291.0	171.0	92.5		安山岩	

遺跡遠景 (北から)



(北西から)



(北東から)



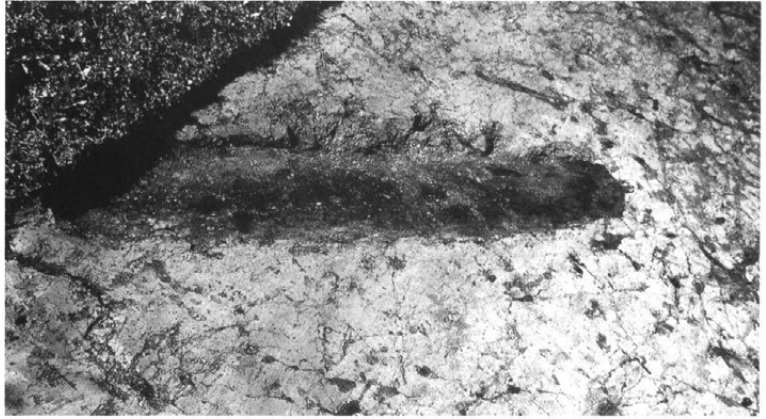
写真図版 2



面的調査範囲



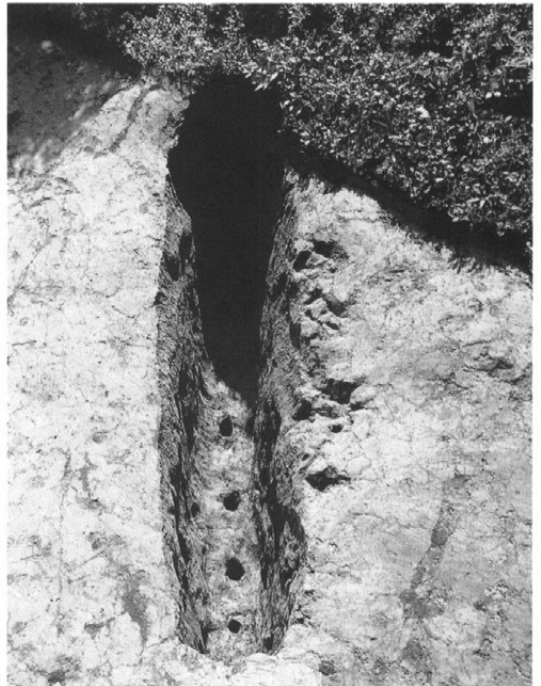
土 層



小竪穴101検出状態



埋土土層

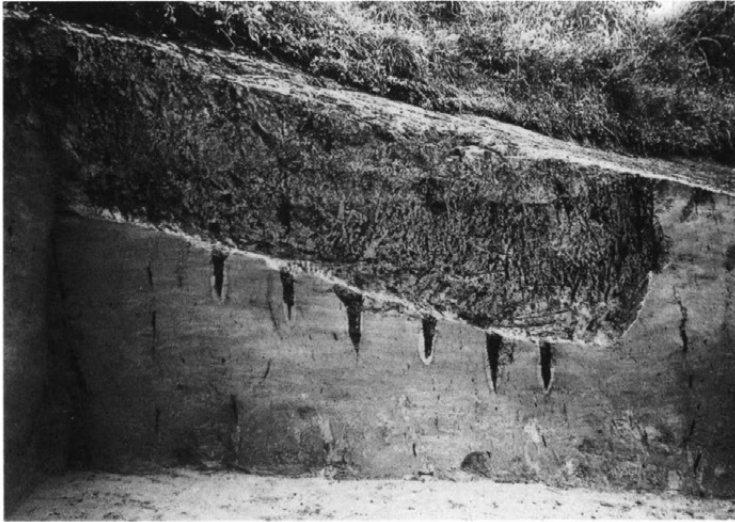


全 景

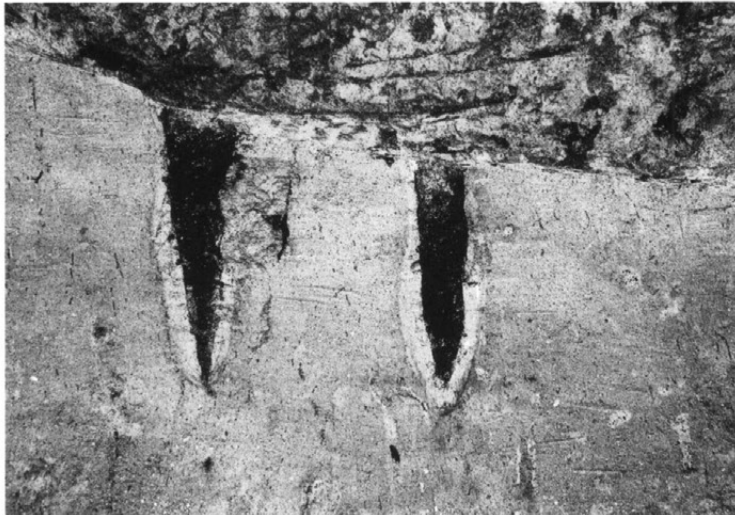
写真図版 4



小豎穴101逆茂木痕  
調査風景



小豎穴101逆茂木痕  
カッティング状況①



小豎穴101逆茂木痕  
カッティング状況②





遺物集中箇処土器  
出土状態①



遺物集中箇処土器  
出土状態②



遺物集中箇処土器  
出土状態③

写真図版 6



トレンチ掘削



トレンチ調査①



トレンチ調査②



トレンチ調査③



遺物集中箇処調査①



遺物集中箇処調査②



遺物集中箇処調査③



写真図版 8



小学生発掘体験



地区内の石造物



石造物遷座後

# 報告書抄録

ふりがな	まえおねいせき							
書名	前尾根遺跡（第6次発掘調査）							
副書名	平成15年度県営圃場整備事業柏木地区に先立つ緊急発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	原村の埋蔵文化財							
シリーズ番号	66							
編著者名	原村教育委員会							
編集機関	原村教育委員会							
所在地	〒391-0192 長野県諏訪郡原村6549番地1 TEL 0266-79-7930							
発行年月日	西暦 2004年03月							
所収遺跡 ふりがな	所在地 ふりがな	コード		北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まえおね根	ながのけんすわぐん 長野県諏訪郡 はらむらかしわき 原村 柏木	3637	20	35度 57分 52秒	138度 12分 24秒	20030602 ? 20031031	2.862	平成15年度 県営圃場整 備事業柏木 地区
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
前尾根		縄文時代   中世	中期 土器集中箇所   中世末 小竪穴 1基  時代不詳 小竪穴 1基	縄文時代 中期土器破片、 石器、土製品、 石製品	縄文時代中期集落遺跡の 北斜面に廃棄された遺物 集中箇所の調査で、今後 の研究課題は多いよう である。  小竪穴は陥し穴で、該期 における陥し穴研究の好 資料である。			

原村の埋蔵文化財66

**前尾根遺跡（第6次発掘調査）**

平成15年度県営圃場整備事業柏木地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日 平成16年 3 月

発 行 原村教育委員会  
長野県諏訪郡原村

印 刷 ほおずき書籍(株)

